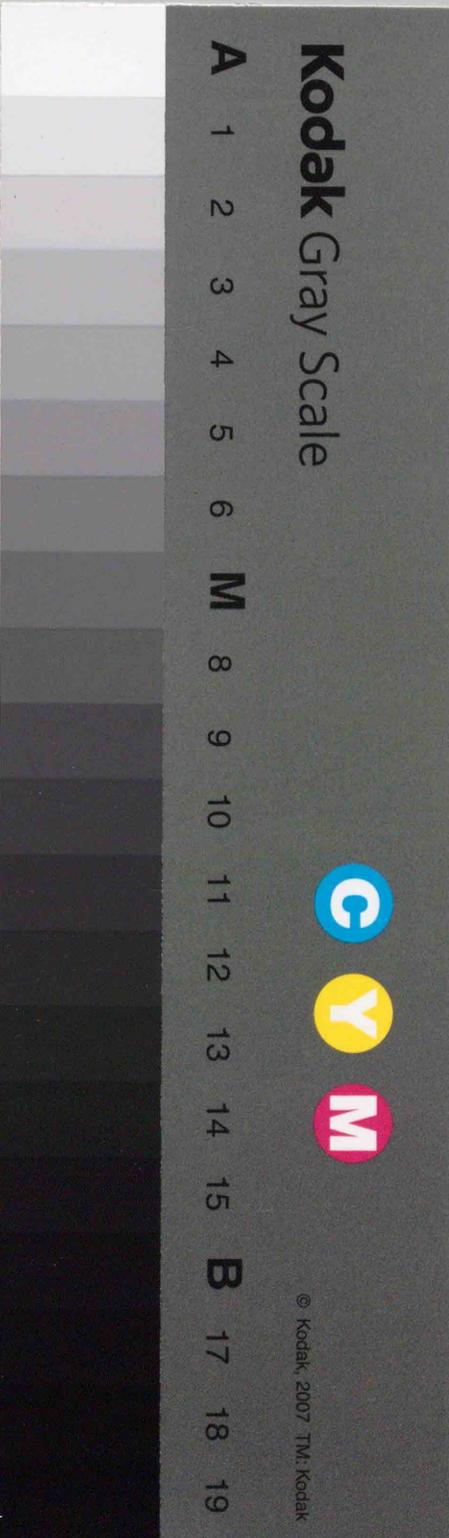
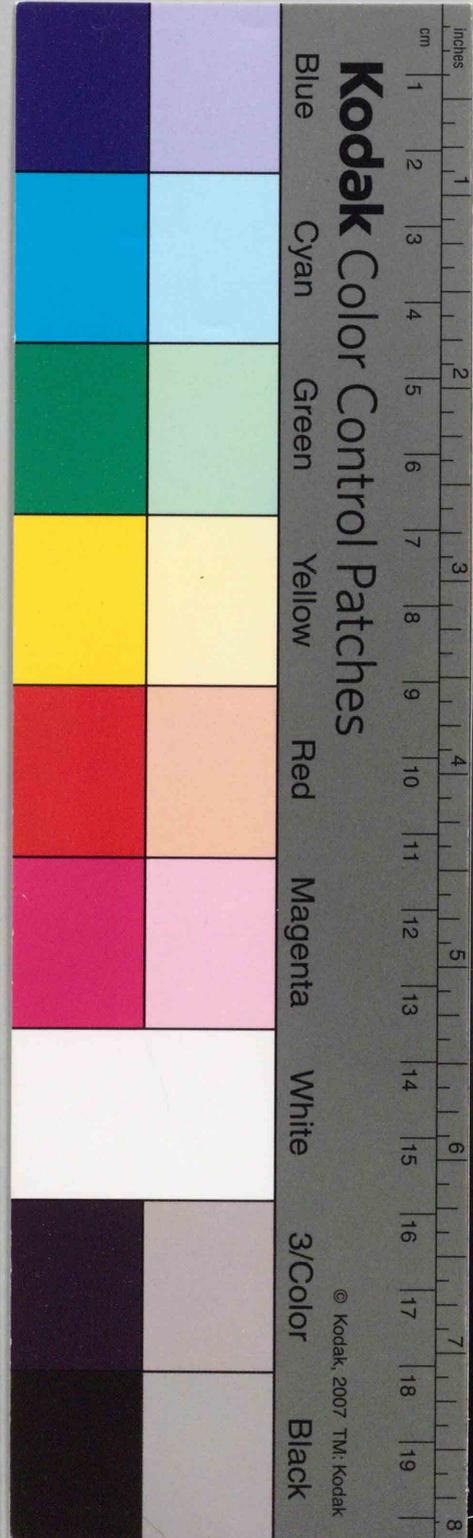


3759
DcB
資料室

訂海中等國語讀本
落合直文編
卷六



41609

教科書文庫

4
810
41-1906
20000 41902

1939
1906



3759
Oct 18



訂再 中等國語讀本 卷六目次

- 一、余の十餘年前……………一
- 二、岩倉公の逸事その一……………一一
- 三、岩倉公の逸事その二……………一八
- 四、岩倉公の逸事その三……………二二
- 五、桐の一葉(短歌)……………二七
- 六、植物の景觀と氣象との關係その一……………二八
- 七、植物の景觀と氣象との關係その二……………三五
- 八、セイロンの古都その一……………四〇

九、	セイロンの古都その二	四六
一〇、	相模灘の落日	五一
一一、	關原懷古	五五
一二、	金吾秀秋	六〇
一三、	室鳩巢に與ふる書	六八
一四、	運命その一	七一
一五、	運命その二	八〇
一六、	冒險心	八四
一七、	ベスピオ	八八
一八、	旅況の古今	九七

一九、	野路の夕暮	一〇四
二〇、	星と花(新體詩)	一〇九
二一、	保元の亂	一一〇
二二、	爲朝の末路	一一五
二三、	桃山時代の工業	一二九
二四、	閑日月(短歌)	一二四
二五、	鹽原	一二六
二六、	昔話三章	一三四
一、	登仙法師	一三四
二、	連歌法師	一三七

三、弓取法師……………一三九

卷六目次終



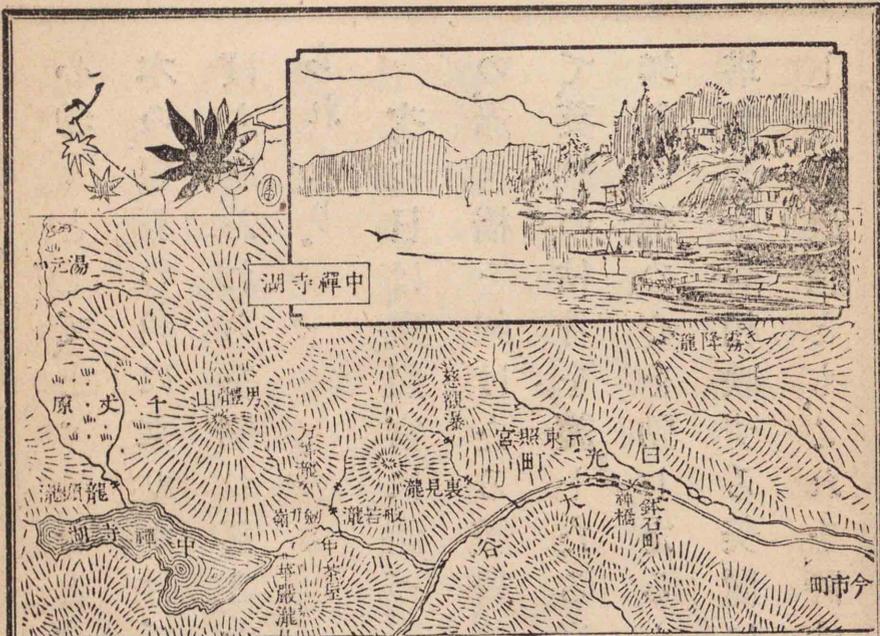
再訂中等國語讀本卷六

一、余の十餘年前

首を回せば、はや、十數年の昔となりぬ。余が通ひし學校は、東京大學豫備門の名を棄てて、高等中學校と呼ばれたる頃なりき。學年試験は過ぎて、六十日の暑中休暇とはなれり。山水を跋渉して、自然の文を究めむと思へど、旅費を得る途なきを、いかにせむ。なつかしき故里に、母の笑顔を見たきは、山々なれど、去年、歸

りたれば、さすがに、女々しく、今年もといひがたきを、
 いかになせむ。こゝに、麻布なる、知る人を頼みて、その家
 の二階に、一夏を送るべきこととはなしたるに、忽ち、
 うれしきたより、は來りぬ。そは、若君の日光漫遊に、供
 せよとのことなり。

夏服一二領、急ぎと、のへて、風雨はげしき朝、上野
 に向へり。若君は、余より、五つ六つ若く、供したる人は、
 余と共に三人、皆、年長けたる人なり。汽車、宇都宮に著
 きて、こゝに一宿し、翌日、馬車を驅りて、今市に出で、日
 光鉢石町の旅店に投ず。尋常一様の旅行、何の趣味も



なければ、下宿屋の外に、
 天地あるを知らぬ余に
 は、汽車の上等も珍しく、
 旅店の上等も嬉しく、馬
 車の借切も面白く、その
 他、立場にて、泡噴く馬に、
 つめたき水を飲まする
 もをかしく、茶屋の老婆
 が、缺盆に、澁茶を載せき
 て、侷むるもをかしく、壯

心勃々として、とゞめむとすれどとゞまらず、はては、木の根、石の角に乗りかけて、躍り上りたる馬車の、去ば去ば、われらを刎ね落さむとするさへ、心よく、感ぜられたり。

次の日は、東照宮に詣づ。天地、すべて、青き中に、一箇の、赤き橋を架けたる畫景、萬株の杉、三百年の苔蒸して、英雄の枯骨を護したる奇觀、これらの感は、有形に、無形に、余の心を動したるものなきにあらず。その、堂塔參差、金碧相映ずる美麗に至りては、美術思想に乏しき我は、何とも、これを評すること能はざりき。たゞ、

意外に感じたるは、細工のこまかき事と、規模の、小なる事との二つなり。

下關や、百萬兩の、鑿の痕。

けふは、中禪寺へとて、皆、かちより行く。裏見、慈觀、方等、般若、いろいろの瀑を尋ねて、中の茶屋に、名高き磁石石を見て、苦しき息もつきあへず、劔が嶺を攀づ。山漸く深く、木立、世の常のさまに異れり。華嚴の瀑にいたれば、今年は、雨少しとて、いまだ、落ちず。中禪寺湖畔に宿りぬ。

中禪寺の湖は、一たび、余が目にも觸れしより後、再び、

忘るべからざる地となれり。黒きまで、濃き山の緑、骨に徹りて、靜なる水の色、沈みて、動かざる空氣、寂しく、光る夕日、死人の額の如き冷氣、肖像の口の如く黙したる木の葉、人跡を印せざる、太古の苔、植物學者の知らざる、不思議の草花、わよそ、これらの、奇異なる光景に打たれて、余もまた、周圍の萬象と共に、沈黙する外はなかりき。こゝに來りて、夏といふ感は、まづ、余の腦裏を去り、次に、世間といふ感、漸く去り、やがて、自己といふ感も、また、惘然として、とりとめなくなりぬ。これより、中禪寺湖畔に、たゞひとり、住みたしとの念は、絶

えず、余が心中を往來せり。

月に水、涼しき夕、神あらむ。

翌朝、戰場が原を横ぎりて、湯元に向ふ。路々の奇草、珍花、數を知らず。原盡きて、森に入る。千年の老木、天を蔽うて、斧斤も、山に入らず。狐兔、近く、出づるを見れば、こゝらには、獵夫も住まずと覺えたり。龍頭の瀑を見て、湯の湖に到る。湖に沿うてめぐれば、門あり。中に、十餘戸、廓をなす。岸邊の水濁りて、硫黃臭きは、温泉の涌くにやあらむ。某の家に投ず。湯浴せむとて、浴衣に、手拭提げて、半町ばかり行けば、湯壺は、板一枚の覆もな

く、山より引ききたる筧の湯、あたりにこぼれて、一面に、
硫黄の凝り固りたる、その臭、堪へがたし。

名も知らぬ、草もの凄き、茂りかな。

湯の湖は、中禪寺よりもさびしく、山々通りて、日に
疎ければ、晝も、もの凄きこゝちす。今夜は、頸筋、やゝ寒
く覺ゆるに、蒲團ひき被きて、涼しき夢を結びしが、次
の朝、下女の來て、昨夜、狼の吠えしを聞き給はざりし
か」と、いひぬ。

若君の、東京に歸り給ひしは、九月にやありけむ、今
は、たぼろに、記憶に残りて、大方は、夢の心ちせり。若君

は、その後、余等と共に、本郷なる寄宿舍に住み給ひし
ことさへありて、いと、睦しく仕へまつりしが、御性や
さしく、少しも、人に驕り給はず、よろづにさかしく、物
のことわりを、ことごとくに、辨へたはしければ、御行末
も榮え給はむとのみ祈りしを、去年の夏は、かなくも、
失せさせ給ひにき。余が、最後に見えたるは、二十八年
の一月かと覺ゆ、新に、建てられたる御邸に參りて、新
年の喜を申し上げしに、この頃は、いたつきは、いかに
か、など、懇に、問はせ給ふ。久しく、見えざりしほどに、御
有様、いたく、ねびまさりて、光さへ添ひ給ひしかば、い

と、かたじけなく覺えて、まかりしに、それ、やがて、終の御別なりけり。君の御いたつきの由、ほのかに、聞きながら、病床に起き臥す身は、え訪ひまつりもせて、心憂き日頃を経ぬ。俄に、身まかり給ひぬと聞きて、遠からず、後を慕ひ奉らむとのみ思ひしが、御初七日の頃より、俄に、熱いてて、下らず。今はと、あやぶみし日も、二日と過ぎ、三日と過ぎて、纔に、命ばかりを取り留めたれど、あらぬかたはとなりて、一步も歩む能はず、立つことさへ、自由ならぬ身とはなりぬ。

十年の昔、無限の希望を負ひて、山水を跋涉し、殆ど、

一點の苦もなくして、未來の幸運を夢みし時、誰か、今日の境遇あることを期せむ。今や、余は、この境遇に處して、安心の地をもとむるに怠らずと雖も、憶うて、曾遊にいたれば、うたゝ、心を惱ましむるものなきにあらず。あはれ、中禪寺の湖神は、いま猶、われを待つや、否や。
(正岡常規)

二、 岩倉公の逸事その一

月日の小車は、めぐりめぐりて、流るゝ水よりも早く、故右府公の世を去り給ひしより、今は、はや、十年あ

まりぞ過ぎぬる。大詔のまにまに、わが國を、富嶽のやすきに置かてやはと思ひ入り給へる、公の一筋の誠心は、天地の間に充ち亘りて、きはみなき後の世まで、語り繼ぎ、聞き繼ぐべければ、今更に、いふまでもなき事ながら、公の逸事の二三を思ひ出づるまゝに書き記して、後の鑑ともし、史人の料にもせむとす。

維新のはじめに、神武の古に復るといふ大義を定められしは、この公の、輔翼の力なりけり。碩學野々口隆正氏の説に、「建武中興の振はざりしは、當時の搢紳に、その人なかりしに由れり。源親房卿は、學識ありて、

時の帝の御ねぼえもめてたかりしかど、その所見は、延喜、天曆の迹に復るにありて、神武の古に復る事を知らず。さてこそ、公家武家の間に、隙を生ぜしなれ」といへり。

故右府公は、搢紳有職の家に生ひ立ち給ひしかど、夙に、大勢を達觀して、王政に、公武の別なきことを看破し、中興の實を擧ぐる爲に、神武の古に復るといふ一大義を唱へ給へしは、これぞ、明治の朝廷に、人ありとは申すべき。その一大義は、百揆庶政の原動力となりて、藤原氏以來、千有餘年の間の盤根錯節、すべて破

竹の勢を以て、破れたり。世の人は、明治の中興は、五百年來の、武門の政を破りたるなりと思ふらめど、心ある人は、溯りて、天平以來の宿弊の、更に、破り難きを破られたることと知るならむ。

徳川氏の、大政を返上せし際には、公は、譴を蒙りて、久しき間、岩倉村に蟄居し、天日をも見給はざりしが、俄に、召によりて、夜中、參内し給ひけり。このをり、公は、一の大囊を攜へて、宮門に入り給ひしが、囊中の文書は、皆、公の、蟄居中に計畫せられて、玉松操といふ人に起草せしめられつる、復古經綸の策案なりき。

この時、大勢なほ、定らずして、物論紛々たるに、公は、俄に、躬を以て、責に當り、從容應答して、雄藩の主も、爲に、容を改め、朝議、大に、決するに至れり。而して、大令、一度發して、外は、將軍を廢し、内は、攝關、議奏、傳奏を廢し、親政の洪圖を、旬日の内に、定め、後世動すべからざる基礎を建てられたるは、實に、公の力なり。就中、復古の第三日に、禁闔に、達文を掲げられて、女房の請謁を納るゝことを、いたく、禁止せられたるは、これぞ、數年の宿弊を除き、將來のために、一大美事を遺したるなるとして、公の、晩年に、親しく、物語志給ひき。この一事は、扇

の要なりとは、知る人ぞ知らむ。

玉松操は、一の偉丈夫にして、平生、書を讀むを樂とし、夙に、神武復古の説を抱きぬ。たまたま、公に知られて、蟄居の一室を貸し與へられ、起居を俱にして、畫策するところあり。公は、玉松の功を推して、「たのれの初年の事業は、皆、彼の力なり」とまで、宣へり。薨去の前年に、一夕、ことさらに、余を召して、玉松の履歷を物語し給ひ、「その功績を、空しくなせそ。書き記して、後の世のかたりつぎの料とせよ」と、懇に、仰せられけり。この夜、余は、他の二人を誘ひて、俱に、侍りしが、その中の一人

は、洩れなく、公の物語を、筆に留めたり。たのれの功を推して、人に譲りたまふこと、大臣として、いと、めでたし。

その後、公の、朝廷に、勧めまゐらせ、斷然と、開國の國是を執らるゝに及びて、玉松は、姦雄の爲に誤られたりとの一語を、いひ放ちて、公の許を辭し、召さるれども、更に、應ぜず、一室に、屏風をたて籠め、その中にて、讀書に、日を送りけるが、「功を論じ、賞を頒つ日に逢はずして、世を去りぬるぞなげかはしき」と、公の宣ひき。公は、蟄居して、いましながら、その家の裏の隠戸より、人

知れず、大久保、木戸、小松、廣澤等の諸名士を引き、内外の大勢を聞かれなどして、この時、すてに、鎖國の非なることを悟らせられつるに、玉松は、露ほども、この事を知らざりけり。かれが、口惜しくたもひつるも、ことありなり。

三、岩倉公の逸事その二

剛膽は、政事家の第一要徳なりとぞ聞ゆる。公は、長袖の人とも覺えぬばかりに、剛毅の徳を具へたはしけり。征韓の議、今にも、蕭牆の内に、變亂を見むとする

時に、陸軍將校の中にて、武勇のきこえある一人は、公の邸に参り、客室に謁見し、一應、二應、議論の末、その人怒れる眼、血をそゞぎ、毛髮、倒に豎ち、長き軍刀を、左の手にて、鞘も撓むばかりに、握り詰め、「貴殿、もし、意見を枉げ給はずば、御身の爲、あしかりなむ」と、いひ放ちつ。膝と膝との間、一尺ばかりにまで、詰めかけたり。この時、公の家の侍ども、次の間に控へ居て、障子の隙より窺ひつ、「あはや」と、手に、汗を握りたりしに、公は、少しも、動ずる色なく、自若として、その坐を守り給ひきとぞ、内の人の物語りし。

公の畏きあたりの御ねばえ、殊に、めてたかりしは、世の人の知る所なるが、大君の御爲とならば、我をわきて、人はあらじと思ひ給へる、隠さはぬ、明き心の深かりしは、これぞ、君臣、水魚とも申し奉るべき。雲の上の事は、筆にするもかしこければ、洩しつ。

公は、故大久保内務卿と、心交、特に、深くねはしき。岩倉村蟄居の折より、大久保卿は、密々の往復、頻なりしが、「公の身の上、心もとなし」とて、夜な夜な、年少き侍を遣して、守衛せさせつることありしを、公は知り給はざりき。西南の亂、平ぎて後、兩公の間に契り給ふ事あ

りしが、日ならざるに、大久保卿の遭難とはなりぬ。一日、公の物語に、「世の人、大久保の志を知りたらむには、いかばかりか、悲み思ふらむ。維新のはじめの十年間は、創業撥亂の時なりき、これより後の十年こそは、内治を整理し、民利を進むる時なれとて、將來の爲に、大に計畫する所ありしに、料らずも、かたみの言葉とはなりぬ」と、宣へり。

四、岩倉公の逸事その三

公は、又、厚く、國體の基礎を重んじ給ひ、晩年、公の奏

上によりて、宮内省に、帝室制度取調局を設けられしは、皇祖皇宗の遺訓の貴き事を、世に知らせむ爲のはからひとぞ聞えし。

公は、勤儉の二字を、大政の本として、輔弼に、心を竭させ給ひき。又、家を治むるにも、儉約を、旨とせられ、台鼎の、高き位に上り給ひし後も、「岩倉村の蟄居の時をな忘れそ」とて、常に、公達を戒め給ひけり。薨去の前、家範を作り、「後の世まで、守文にせよ」とて、子孫に貽し給ひしが、その附録一篇は、専ら、奢侈と遊惰とを戒め給ひ、重き病の床にましましつゝ、親しく、旨を授けて、侍

ふ人に、筆執らせ給ひし條にぞありける。一門の人々が、案文に調印せしは、七月十五日にして、薨去の前五日なりけり。今はの際に、遺言ありて、「たのれの墓石は、父君の墓石の寸法に準へよ」と、ありきとなむ。

公は、日に夜に、公の事にのみ、心を碎きて、寸時も暇あらせ給はざりき。朝五時前には、目を覺し、「侍やある」と、聲かけさせ給ひ、今日は、何某をば、何時に召せ。次に、何某をば、何時に呼べ。又、明日は、何某に、朝何時に來れ。何某に、夕何時に參れと、記して、申し遣せなど、仰せられき。多くの公達は、父君の代筆として、文書くことに

忙しかりきとぞ。

公の病に侵され給ひつるは、明治十六年の春なりしが、後より思へば、十五年の頃より、何となく、あらざらむ後の世の心づくしの節々を、知る人に語らせ給ひしことぞ多かりける。同年の冬、ある人の許に贈り給へる書の末に、

さりともと、かきやる浦の、藻鹽草、

誰がわたりたちて、かづきあぐらむ。

と、ありき。先立つも、後るゝも、世の習とはいひながら、御國の爲に、行末を思ひ遣られし、公の心こそ、いと、あ

はれなれ。

公の平生の仰に、大臣たるものは、その身の進退によりて、節操を、二つにすべきにあらず。維新の功臣、晩節を、全くせざるもの多きぞ、口惜しきことの極みなる。我こそ、躬を以て、人臣の標準は示さめと、宣ひしが、病重らせ給ひし後、辭表を捧げむことを思ひ立ち給ひしかば、同僚の諸卿が支へ止めまゐらせしかども、聽き入れ給はず、是非にとて、歎き請ひ給ひしかば、上には、忝くも、誠ある意ばへを斟ませ給ひ、聞き届けさせ、厚き惠の御勅をさへ、下し給ひけり。かくと承りて、

公は、さしにも重き衾を押し退け、涙に咽び、天恩の忝きを拜謝して、急ぎ、家の子等を召し集へられて、「今日こそは、病の輕きを覺えたれ。それ、杯まゐれ」とて、酒を賜ひけり。人々、歡の色をなしたりけるが、さて、その翌日に、事、重らせ給ひぬるぞかひなき。今はの際まで、夢現の間にも、おぼやけの事のみ、心に掛けさせ給ひ、亡からむ後の事までも、人もて、雲の上に聞え上げまゐらせられたりといふ。

余は、本末の序もなく、思ひいつるまゝに、書きつゝけぬ。あはれ、この文讀まむ人々よ、なき人のかきやりよや。(井上毅著 梧蔭存稿)

五、桐の一葉(三條實美)

秋來ぬと、秋が來るとたちたる桐の、吾がひと葉にも、一葉もまづこぼるゝは、先づこぼれる涙なりけり。

○ かりそめと、おもひし宿の花すゝき、

今年もわれを招きとめたり。

○ 目下程迄モソウイ事ヲ運ニテ味ヲ新ノ身ナルニ
かくばかり、うきを重ねし、袖ぞとも、

世シラモ知ラズニテ秋ノ露ハわが身ニ
志らてや秋の露はわくらむ。

六、植物の景觀と氣象との關係その一

植物の景觀と、自然の氣象との間には、たのづからなる關係ありて、互に、相依り、相助けて、以て、この宇宙の美を現出するなり。故に、晴、雨、曇、雲、風、霧、露、月等の、まざまの氣象に對する、植物の景觀に注意すれば、ま

ことに、たも志ろき趣あるものなり。

春の日は、霞ウスクヒホチアル事たなびきて、曇がちなるものなるが、かかる空合に、山櫻の咲き亂れたるは、まことに、趣深きものにして、その調和モ、調和ハ知レタルの美、いふべからず。今、假に、この櫻花をして、澄み渡れる秋の空に開かしめば、いかなるべきか、たそらくは、優美艷麗なる、その特性は、その十が一をも現ずること能はざるべし。又、春の野の霞上品ニ美シクに籠められて、をち方チウホウの山々は、淡き紫色に包まれ、紫雲英、蒲公英などの、一面に、咲き亂れたる中に、蝶、蜂などの、たつれ來て、心ちよげに、飛び狂へる光景は、よ

く、この頃の日和の特徴をあらはせり。

萬緑の候となれば、快晴の日にも、空気は、水分を含みて、何となう、夕立の雲、起り來べきかと思はるゝものなるが、その青き空に、緑滴らむばかりなる茂樹、叢竹の、枝さし交したるは、その配合、ことに、妙にして、人をして、そゞろに、夏の面白きを感じしむ。

やがて、秋晴の節となれば、空気、きよらかになりて、遠きあたりまで見やらるゝに、槭樹、公孫樹などの色づきたるが、その快晴の氣に照し出されたるなど、また、いひ難き趣あり。冬の末より、春の初にかけては、日

中にて、寒さはげしきに、その寒く、晴れたる朝に、梅蠟梅などの、いちはやく、咲き出でたるは、心ちよきものなり。

曇の空には、さまざまあれど、春の花曇は、最も、趣ありて、よく、その特徴をあらはせり。又、今にも降り出さむかと思はるゝばかりなる、雨を含める空には、柳、杉、縦などの林は、最も、たもしろく見ゆ。

雨のたも志ろきは、燕子花、花菖蒲、溪蓀などの咲き出づる、五月雨の頃なるべし。降るかとするれば、晴れ、晴るゝかと思へば、また、降り出でて、そのたび毎に、花の

艶麗を増すなど、人をして、限なき、一種の幽情を催さしむ。殊に、これらの植物の花弁と葉とは、たのづから、雨を防ぐやうに作られたるを以て、雨滴は、その上に、小き玉水となりて、とゞまれるが、その美しさ、まことに、形容し得べくもあらず。

驟雨、雷雨などの、はげしき雨にも、また、たのづからなる、植物の配合はあるなり。そは、多く、雨滋き地に生育せる植物、又は、さる地より、移し植ゑられたる植物にして、彼の梧桐の如きは、その一例なり。その、直立して、膚青き幹、その、淺く、切れ込みたる、廣き葉の、一は、新

に、洗はれて、一は、鮮緑の色を増し、一は、ばらばらと、音立てて、その葉末より、餘滴を去たらし、光景は、よく、この植物の、かゝる急雨に適せるを見るべし。

蓮の葉も、また、雨を受くるに適せるものなり。そは、葉の表に、一面に、天鷲絨のやうなる、こまかき突起ありて、その間に、空氣を含むをもて、雨に遭へども、少しも濡るゝことなければなり。かくて、又、その空氣は、よく、光線を反射するを以て、葉の上にとゞまれる玉水を、して、一種銀色の光を放たしむ。芋の葉も、殆ど、これに等しき構造をなせり。

秋雨に就きて、聯想せらるゝ植物は、少からざれど、まづ、人の心をひくは、芭蕉運ち思フなるべきか。秋も、末になりて、その葉の破れ、筋のあらはれて、見るから、はかなげなるに、寂しき雨の、うち灑ぎたる、人をして、殆ど、蕭條アワレタの氣に堪へざらしめむとす。

松は、特に、雨に適せる植物にはあらねど、その雨に沾シメひて、細き葉の、束ねたるやうになりて、少し、うつむきつゝ、雨滴を去たゝらすさまは、また、志めやかなる趣なきにあらず。

七、植物の景觀と氣象との關係との二

雪は、寒國のものなれば、これに適するは、寒地の植物なれど、暖地の植物も、また、これに遭ひて、たも志るき景色を見するものあり。彼の常磐木の類、例へば、樅、杉、松などの類の、濃緑なる葉の、純白なる積雪の下より露れたる、又、南天ナンテン燭ロウの、赤き實の、その間に、ほの見えたる、共に、色彩の配合上、見棄て難き美觀なり。又、松の、その魁偉なる枝もて、竹の、その、志ヤカなやかなる枝もて、積雪の重みに堪へたるさまは、一は、豪壯、一は、清楚の趣を表して、共に、賞すべし。

風の趣も、また、棄て難し。そよ吹く風の、草木をわた
 りて、やさしき樂を奏する、木（木がらしの落葉を吹き捲きて、すさまじき音をたつる、共に、興（木がらし）なからずやは。こ
 とに、野邊の芒、水邊の蘆の、秋風に戦げる趣は、秋の風
 物の、最も、あはれ深きものなるべし。また、秋の夕、澄み
 わたれる空に、一點の雲もなく、（見下指し定ナク）さしたる風のわたる
 とも見えぬに、木々の梢の、そよそよと、うち戦ぐは、い
 ひ志らぬあはれの籠るものなり。

松風、松籟（松の音）などいふも、これとたなじ趣にて、風もな
 き空に、松の梢の、ひとり、美妙なる樂を奏し出づるは、

まことに、何の音ぞと怪（アヤレ）まるゝばかりなるが、これも、
 眼に見えぬ風の見するあはれにして、古來、幾度か、詩
 人の吟咏（ゲイ）に上れり。

雲は、四時を分かず、をかしきものなり。春霞のたな
 びきて、花かと思紛（マヤカシ）ふ空合、夏草の茂きが上に崩れか
 かれる雲の峰、秋野の空に飛ぶ白雲、いづれも、皆、とり
 どりのあはれ、こもれり。又、彼の木曾、日光あたりの樅、
 柵、落葉松などの生ひ茂れる深林に、なかば、薄雲のか
 かりたるは、まことに、よく、幽邃（オウスイ）の趣をあらはすもの
 なり。

霧は、高原に多きものなれど、平地、平原にも、また、全く、なきにはあらず。夏の頃、朝霧の立ちたる時、杉、樅などの、黒き常磐木の見えかくれするさま、田沼、湖水などの一面に、罩められたるさま、亦、一種の風趣あり。露は、夏秋に下るものにて、朝、夙く、起き出でて、草むらの間を行けば、その葉ごとに、美しくして、恰も、白玉の如くなるを見む。ことに、稻、蘆などのやうなる、禾本科の植物、又、オシロイ、オシロイなどの葉の、緑なる露は、規則正しく、置けるを以て、その觀、頗る、美なり。月は、季節によりて、その觀、一ならず。春の夜は、曇が

ちにて、朧月、わほし。世には、この朧月に、夜櫻を配して、得がたき美景なりといふものもあれど、彼の、朝日に匂ふ山櫻の、優美にして、壯快なるには比すべくもあらず。夏の月は、これに反して、頗る、快潤なるものなり。ことに、雨過ぎし木の葉、草の葉に映じたる月光は、いひがたき涼氣を催さしむ。中秋の満月は、空に亘えて、その光、まことに、常と、異なるは、よく、人の知れるところなり。月夜に配合せる植物は、あまり、多からず。彼の、暗香の浮動を賞すべしといひならはせる、梅なども、その

詠梅 林和清
 舞弄芳搖格獨留
 占斷風情何處
 疎影橫斜水清淺
 暗香浮動月黃花
 西相會約下先翁
 曾得若知命斷魂
 幸有微吟可相和
 不須金樽與檀栢

花の美觀は、なほ、晝間を以て、勝れりとす。されど、一面よりいへば、とりいでて、これといふべき好配合のなきは、たまたま、以て、適くとして、よからざるなき、月の美質を示せるものにして、松の月、柳の月、竹の月、梧桐の月、皆、とりどりのあはれを具へざるはなく、さては、秋野の満月、夏山の曉月など、いづれも、他に求め難き景致を具ふるにあらずや。(三好學著植物生態美觀による)

八、セイロンの古都その一

「カンヂーに往きしか」とは、コロンボ市民の、常に、旅

客に對ひて、提起する質問なり。蓋し、カンヂーは、本嶋の古都にして、佛祖の遺蹟の存せるが故ならむ。余は、かねてより、同地に遊ばむとの志ありしかど、途上の汽車、頗る、不完全にして、ともすれば、中途にして、停止することありと聞き、いまだ、決行せざりしに、同僚の中に、頻に、同行を勸むるものありければ、遂に、意を決し、一人の黒奴を備ひ、まづ、電車に乗じて、マラターマ停車場に向へり。時に、五月一日午前七時なり。

停車場には、又、數名の同僚の先著せるあり。一行、相合して十四名、汽車の一室を占領せり。やがて、汽車は、

一聲の鐵笛と共に、徐々、進行を始む。車窓を開きて、眸を放てば、風景、一として、奇ならざるはなく、沼池、遙に、相連りて、紅白の蓮花の、點々、水を染めたるなど、美觀いふべからず。冷風、一たび、動けば、清香、（タマヤク、速、レ、ソト）脈々として、車窓を撲ち、心氣、頓に、爽然たり。汽車は、帶の如き小徑を走り、一轉して、林中に入り、椰子、檳榔樹、麴包樹の、參差として、枝さし交したる間を過ぎて、やがて、小丘の連りたるあたりに出づ。見わたすかぎり、蔦葛生ひ茂りて、（モウ、モウ）莽々たり。そこには、猛獸毒蛇のひそめるものありて、（草、木、ノ、生、エ、カ、リ、タ、ト）時に、軌道の附近に出沒して、人を害することあり

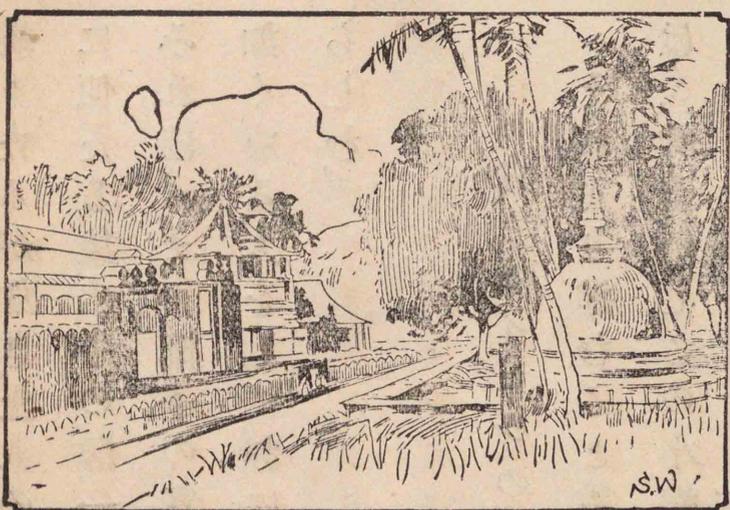
といふ。

カンヂー停車場は、コロンボを距る七十四哩にして、一千七百呎の高處にあり。停車場に近づくに従ひて、軌道の勾配、漸く、急になりゆき、次第に、その度を増して、遂に、螺旋の形をなして、山上に上り行くなり。右は、斷崖千仞、谷深くして、底ありとも見えぬに、左は、また、（ハ、元、何、ト、エ、フ）削れるが如き巨巖、高く、空に聳え、樹木、瘦せて、疎なるなど、何となく、人をして、（モ、ス、コ、イ）悽愴の感に堪へざらしむ。かゝる險難の境なるを以て、鐵道敷設の工事、頗る、困難を極め、過ちて、斃れし工夫、その數を知らず、永く、こ

ここに鬼哭峠ゴウキツトウゲの名をとどめたりもし、汽車にして、その
 一步を誤らむか、われらもまた、その迹を履まむのみ。
 去かも、機關師の不熟練なる、去ば去ば、汽車の進行を
 停止し、或は後退して、幾度か、われらをして、慄然リッゼンたら
 しめたりき。されど、幸にして、何の恙もなく、午前十一
 時半、カンデーに到着せり。

かくて、われらは、まづ、黒奴の人車を備ひて、クイン
 ス、ホテルに向ふ。道路、砥の如く、鬱葱たる大樹、これを
 挟みて、涼意、まことに、掬すべし。ホテルは、カンデー湖
 畔（五ツクスツヤレ）にありて、最も、風景に富めり。一行は、ホテルの馬車

數臺に分乗して、そこを出でたり。對岸の丘をめぐり



寺古一のンカ

て、遙に、瞰下すれば、峯巒
 四方を圍みて、綠樹、市内
 に連り、その盡くるとこ
 ろ、湖水、鏡面よりも、滑（スベ）に
 して、燃ゆるが如き草花、
 今をさかりと咲き亂れ、
 そのあたりなる、白堊の
 古刹（コイテ）と相映じて、色相の
 配合、美妙を極む。赤蛇の、

食指の動くを禁ず
宣公四年
鄭靈公の臣
楚靈公の太子
子公
子家

蜿々たるが如き、土人の市街、豆大の黒點の蠢動するに似たる象、水牛の群、一々、指點すべし。更に、一豆大の黒點がワレウの動カクハクハク身邊を顧みれば、バナ、椰子の實などの、黄熟して、果汁、滴るが如くなる、人をして、頻に、食指の動くを禁ずる能はざらしむ。

九、セイロンの古都その二

それより進むこと數丁、黒奴、卒然、われを顧みて、いはく、「紳士、かしこの小嶼を見よ、最後のカンデー王が墳墓フシボのある處にして、今も、古蹟の一に數へらる」と。さ

ては、セイロン滅亡の悲劇ヒビキを留め、後人をして、盛衰興亡の常なきを歎ぜしむるは、かしこの墳墓の主なりしよ。歴史を考ふれば、二千四百四十餘年の昔、シンヘル王はじめて、このセイロン嶋に君臨してより、系統連綿として、國富み、民榮え、佛法、王法、二つながら、行はれて、花咲き、鳥歌ひ、極樂淨土を、まのあたり、現出せる如き觀ありしに、西曆一千五百年、葡人の海の一方より、現れきて、一たび、足を、この地に入れしより、國內の平和は、漸く亂れ、次いで、蘭人の侵入となり、はては、英人の亂入となりて、國內、遂に、麻の如くに亂れぬ。か

くて、一千八百十五年、國王と英國總督との間に、大衝突を惹き起し、劇烈なる戦争となりぬ。義を重んじ、恥を知れる黒人は、憤然^{憤慨}起ちて、王軍に投じ、干戈を執りて、英兵に當りしかど、大勢の趨くところ、いかにもする能はず、連戦連敗、勇士、多くは、戦場の露と消え失せぬ。こゝにわいて、勢に乗ぜる英兵は、進軍の喇叭につれて、カンデーに進入し、王宮を圍み、直に、王を擒にし、凱歌を揚げて、引きあげたり。その後、王は、獄中に、憤死を遂げ、數千年來の社稷は、こゝに、全く、亡びて、全嶋悉く、英國の所領となり終りぬ。嗚呼、忠臣、悉く、戦死し、

妻子、殺戮せられて、身は、外人の囚虜となる。盛者必衰の習とはいひながら、懷うて、こゝに至れば、誰か、よく、この、可憐なる王の末路に、一掬の涙を濺がざるものあらむ。憐むべし、數千年來、その恩に浴し、その粟を食みたる黒人は、既に、氣慨を失うて、今や、王を憶ふことの、冷なる、なほ、路傍の人に對するが如く、墓前の香華、久しく、絶えて、あと弔ふものもなし。水、とこしなへに、恨を浮べて、旅客の腸を斷ち、鳥、空しく、悲を訴へて、多情なる遊子を泣かしむ。われは、今昔の感に堪へず、首を垂れて、瞑目すること、多時。

それより進みて、一古刹を訪ひ、更に、寺門をいでて、右折して、進むこと、百歩ばかりにして、左方に、一大菩提樹の立てるを見る。枝葉、蓊々として、天を蓋ひ、人をして、靈あるかを疑はしむ。こゝは、嘗て、佛祖の、衆生をあつめて、説教せし地なりといふを聞きて、遙に、二千餘年の昔、かの聖が、衆生のために、あまねく、國內を歴遊して、その、諄々たる説法をなしし當時を想ひ、顧みて、この木石の親しく、佛體に觸れたるを考ふれば、木のづから、尊崇の念の、油然として、生じ來るを覺ゆ。乃ち、記念のために、菩提樹の數葉を採り、それより、馬車

聲 一
二 須
三 斯
四 阿
聲 聲
聲 聲
聲 聲
聲 聲

を反して、停車場に赴き、歸途につけり。日、既に、落ちて、微雨蕭々、たゞ、數千の螢火の、闇を照して、飛び交ふを見るのみ。(小笠原長生著渡英日録)

一〇、相模灘の落日

相模灘の落日
ハルヲ暮キル

秋冬、風、全く和ぎ、天に、一片の雲なきゆふべ、立つて、伊豆の山に落つる日を望むに、世に、かゝる平和の、また、多かるべしと思はれず。

日の、山に落ちかゝりてより、その、全く、沈みをはるまで、三分時を要す。

はじめ、日の西に傾くや、富士を初め、相豆の連山、煙の如く淡し。日は、いはゆる白日、白光ハクイシクシ爛として、眩しきハクイシクシに、山も、眼を細うせるにや。

日、更に傾くや、富士を初め、相豆の連山、次第に、紫になりぬ。

日、更に傾くや、富士を初め、相豆の連山、紫の肌に、金煙を帶ぶ。

この時、濱に立つて、望めば、落日、海に流れて、吾が足下に到り、海上の舟は、皆、金光を放ち、逗子の濱一帯、山と云はず、砂と云はず、家と云はず、松と云はず、ころが

りたる生簀の籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉として、燃えざるはなし。

かゝる風のゆふべに、落日を見る身は、恰も、大聖の臨終に待する感あり。莊嚴の極、平和の至、喜と云はむは過ぎ、あはれと云はむは、いまだ、及ばず。

已にして、日、愈、落ちて、伊豆の山にかゝるや、相豆の山、忽にして、印度藍色に變ず。唯、富士の嶺、舊に仍つて、紫の上に、更に、金光を帶ぶるのみ。

伊豆の山、已に、落日を銜み初めぬ。日、一分を落つれば、海に浮べる落日の影、一里を退く。日は迫らず、寸又

寸分又分、別れ行く世をば顧みがちに、悠々として、落ち行く。

已にして、のこり、一分となるや、急に、落ちて、眉となり、眉切れて、線となり、線、瘖せて、點となり、忽にして無し。眼を上ぐれば、世界に、日なし。光消えて、海も山も、蒼然として憂ふ。日は入りぬ。去かも、餘光の、忽ち、箭の如く上射し、西空、金よりも、黄なるを見ずや。偉人の歿せる後、實に、かくの如し。

日の落ちたる後は、富士も、程なく、蒼ざめ、やがて、西空の金は、朱となり、くすぶりたる樺となり、更に、濃き

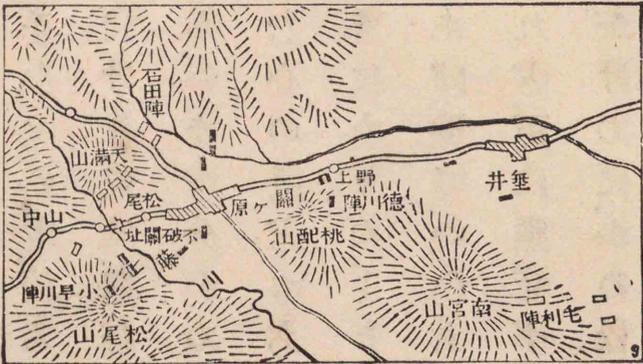
プロシヤ藍色となり、日の遺蘖とも思はる、明星の、次第に、暮れ行く相模灘の上に、眼を開きて、明日の日出を約するが如きを見る。(徳富健次郎著自然と人生)

一一、關原懷古

藤川に至りぬ。關屋の址は、今、さだかならず。右の方に、松尾山、やゝ、はなれて、左の方に、天満山見ゆ。關が原の驛に至れば、連れる山々、桃配、南宮山など、木立深く、茂れり。慶長の昔を思ひやれば、いと、哀なり。えも去りやらず、去ばし、うちやすらひて、こなたかなた、見めぐ

らすに、その當時ねぼえて、何となく、さしぐまるゝも
悲し。
（疾ヲサレケマレコト）

石田三成が、豊臣氏の衰を、いたく、歎きて、關西の大
名どもをかたらひ、さばかり、勢を振ひけむ徳川氏を、
うち滅さむと思ひ立ちけむ、雄々しさよ。故太閤の御
魂も、天翔りて、いかに、その志をうれしと思ひけむ。軍
の勝敗は、時の運にありて、戦の罪にあらざるとこそい
へ、豊臣氏の衰へ行くべき時來れるは、せむかたなし。
さりとして、はた、徳川氏の、この度の軍、不義なりとはい
ふべからず。居ながら、關西の軍を迎へて、待ち戦ふべ



きにあらねば、こゝまで、うち上りけむ、さる方に、いみ
じき智略といひつべし。たゞ、悪む
べきは、かの、松尾山にたて籠りけ
む秀秋よ、己が養ひたてられし太
閤の恩を忘れ、何の恨もあらざる
べきに、秀頼親子の心をも思はで、
など、徳川氏に、味方方人は志つらむ。こ
とわり知らぬ武士のならひなり
とて、餘なる心ぞや。

その日となりて、戦は、西東の兵ども、皆、とりどりに、

敵を引き受けて、更にひまもなし。矢叫やこゑの音は、山王の神こだまをひひかし、流るゝ血汐は、山川となりて、戦、酣あはれになり
 にけり。或は、進むもあり、或は、退くもありて、いづれと
 も、いまだ、分かぬものから、さばかり、思ひ入りたりけ
 む心のほどもあればにや、ともすれば、西の方、進みぎ
 まになりぬ。よき頃なりとて、三成方より、烽火をうち
 あげ、豫て、いひあはせし、南宮山なる味方に知らせつ
 れど、更に、應ぜず。それを、いかにと思ふをりしも、思ひ
 がけぬに、かの松尾山より、ひた下りに、味方の陣にう
 ち入るものか。年月かけて、計盡たばかりけむ心も、皆、水の

泡と消え果てて、東の方の勝となりけるそのあり
 さま、今も見ると心ちぞする。

あはれ、うち滅されけるつはものの心よ、佛のいふ
 らむ妄執ぼんじともなりぬべし。君れもひの誠、今は空しと

看做けんさしたりけむ三成が心、さばかりと思ひ遣られて、
見いとこそ、いたましけれ。さるを、この主の心の程をも

思ひ知らず、「姦臣けんしんぞ」など、あしざまにいひなすらむは、
 いとも、心うき事なり。それも、徳川の世の程こそあら

め、今、誰に諛うそひての論とかせむ。今日、こゝに來りて、思
 ひ出づるまゝに、ハッララテ弔なぐさひがてらとぞ。一尋フツクシトニシツ

(飯田武郷著蓬室集)

一一、金吾秀秋

秀秋、十六歳にして、征韓の大將軍を承りて、宗徒の大名あまた、引き具し、都合、その勢、十六萬三千人、五月二十二日、大阪を立ちて、七月二日、朝鮮にわし渡り、釜山城に入る。

明くれば、慶長三年正月四日、蔚山の後卷し、まつさきに進み、わが手にかけて、馬武者十三騎、切つて落す。わよそ、討ち取るところの首、一萬三千二百三十八、太閤にたてまつる。

この使者、同じき月二十四日、伏見の城に馳せ參る。

太閤、軍のさまを聞し召して、御感（せむ）な、めならず、わは

しけるに、石田治部少輔三成、ひそかに、申しけるは、金

吾殿の御ふるまひ、ゆ（よし）しくも聞えさせ給ふ。さりな

がら、既に、御代官として、向ひ給ひし御身の、みづから、

釜山城を出て給ひ、深く、敵の中に入りて、戦はせ給ひ

しこと、事（こと）の體、輕卒にこそ存ずれ。かたき、若し、その隙

をうか（ひ）ひて、釜山城を攻め取つて候はむには、本道

との通路、自由なるべからず。この後は、かゝる御振舞

志かるべからざる旨を仰せ下（さ）さるべりもや候ふと、

下サルノガ宜シク候マシヨトモフタ

申しければ、太閤げにもと思し召したる御けしきにて、秀秋の功を賞し給はず。

秀秋、太閤の仰蒙りて、城を築くこと九箇所、軍勢を籠め置きて、同じき三月十七日、釜山港に、船を浮べ、四月四日、大阪に著き、明くれば五日、伏見の城に參る。秀秋に従ふところの、七人の軍奉行、竝に、加藤左馬助、嘉明、同じく參る。伏見にありあふ大名、悉く、參りつどひ、秀秋の凱陣を賀し申さる。

太閤、やがて、御出ありて、御對面の事畢りて後、太田飛驒守一吉、秀秋の軍し給ひしやう、一々に、述べて、感

じ申す。太閤、いやいや、大將軍の、みづから、諸軍と、功を争ひ、輕々しき軍志けむこと、然るべからず。われ、秀秋をさしむけしこと、かへすがへすも、後悔にたもふなり」と、仰せらる。秀秋、聞きもあへず、世の常の御使ならむには、幼弱の身、などか、辭し申さては、あるべき。追討の御使なればこそ、仰をば承りつれ。志かるに、今、人々の聞き給ふところにて、御後悔の旨を承るこそ、口惜しけれ。秀秋の、不覺先聲の事あらむには、軍奉行の人々、只今、御前にて、まつ先聲すぐに申し、速に、秀秋が首を刎ねられて、御憤を散ぜられむやうには、はからふべし」と、押し

返し、押し返し、申ししかば、太閤御座を御たちあつて、内に入らせ給ふ。

治部少輔三成、参りて、秀秋の家老、杉原下野守、山口玄蕃允に向ひ、「大殿の御氣色、よからず。まづ、御館に歸し入れ、参らせらるべし」といふ。秀秋聞きて、志やくびうち落さむとする有様けしきにて、うち刀取つて起つ。徳川殿、引きとめ給ひ、とかく、制して、彼の館に伴ひ給ひしに、太閤の御使として、尼孝藏主、入り來り、仰を傳ふ、首ヲ打テ落ス「そもそも、去りし頃、蔚山の戦に、輕々しき振舞し、又、只今の申し條、甚だ、奇怪の至なり。すべからく、はやく、

筑前の國を返し奉りて、越前の地に徙るべし」とありければ、秀秋、大に、怒つて、「やあ、尼前、秀秋が身に、國奪はれむ罪、覺えず。命あらむ限は、たゞ、もとのまゝにこそあるべけれ。速に、首を刎ねらるべう候ふと申せ。尼前」とて、わつかへさる。徳川殿、孝藏主に向ひ給ひ、「仰、謹んで、承りぬ」と宣ふところを申さるべけれ」とありければ、尼前承り、「この上は、内府の御はからひにこそより候ふべけれ。政所の御方へも、その由を申すべきにて候ふ」と申して、退り出づ。

徳川殿、秀秋に向ひ給ひ、「只、ともかくにも、仰に従

ひ給はむことこそあらまほしけれ。政所の歎かせ給はむには、太閤も、そのみは、心づよくはたはせじものを」と仰せければ、「さらば、秀秋、みづから、三成が首切つて後、内府の仰にこそまかせ候はめ」といふ。徳川殿も、今は仰せらるべきやうもなく、杉原、山口を、ひそかに、召され、まづ、家人少々、越前の國に下さるべし」と仰せければ、外様の侍、少々をさし下す。

かくて、徳川殿、大納言利家と共に、秀秋の事、御なきあらむとありしかども、利家、辭し申されければ、ひとり、日々に、太閤に参り給ひつゝ、ことに、仰せ出さる

る旨もなし。太閤、いかに、かくは、毎日、見え給ふやらむ」と、仰せければ、「秀秋の、國遷されむこと、いたはしう覺えて、このよし、申さむとて、参り候へども、えこそ申しもいだし侍らぬ」と答へ給ひて、その後、日々に参り給ふに、太閤、又、はじめの如く、仰せければ、徳川殿の答へ給ふやうも、はじめの如くなりしに、太閤、さほどに思ひ給はむには、内府のはからひに任せ参らすべし」と、仰せければ、徳川殿、喜ばせ給ひて、秀秋のもとにむかひ給ひ、杉原、山口召して、越前に下りし侍ども、召し還さる。

程なく、六月二日に、徳川殿、秀秋とうち連れ、参らせ給へば、太閤、御對面あつて、饗宴の儀、事をはり、秀秋に、物、多く賜ひ、又、徳川殿にも、引出物（引きもの）ひかる。秀秋、この日、長崎伊豆守を、徳川殿へ使として、この度の御芳恩、いづれの時にか忘れ候はむ。報い参らすべき時こそ侍るべけれ」と、申し入れられたり。（新井君美著藩翰譜）

一三、室鳩巢に與ふる書

昨日の御報拜誦、驚愕、是非に及ばず候ふ。然りといへども、火急の處に、御全家、御異狀なきことをば、この

上なき御幸福と思し召さるべく候ふ。たゞ、多年、御拵据なされて、求め得られたる御書籍と御手録（てしよ）との事、承り候ふだに、心を苦め候ふ。去かし、これも、身より外のもの、是非に及ばず候ふ。貴兄、既に、御學業も、成就候へば、これより後、書籍を憑みて、たのまぬことに候ふ。令郎、いまだ、御學問最中の御事に候へば、せめて、書籍をば、御貽し候ふ御はからひの事、あながちに、俗輩、買田問舎（いんしゃ）等の事に比すべからず候ふ。某家藏の書、もとより、多からず候へども、二重になり居るもの、少々、これ



白石花押

あり候ふ。書目の簿も、何の中にやらむ入れ置き候ふ故、昨夜、尋ね候ひしかども、知れず候ひき。されど、覚え候ふ處は、四書史記、漢書など、これあり候ふ。乃ち、令郎

室直清

鳩巢筆

へ、これを進ずべく候ふ。この外の書、恩賜のもの（將軍ヨリ賜ハリタシモノ）の外は、何にても、御用次第、御貸

し申すべく候ふ。御事も缺かせらるまじく候ふ。

この節も、手前の事、御物語申し候ひし如くなる故、十分なる御用には立ち候はぬこと、くちをししく候へども、いさゝか位は、身に及び候はむか。御心ねきなく、

漢書
前漢書 班固
後漢書 范曄

仰せ下さるべく候ふ。廉潔（心誠清ク）を立て候ふも、事により、相手にもより候ふ。尋常同門も、兄弟の親に同じく候ふ。況や、たゞ同門と申すばかりにもこれなく、秦風に、與（善通同門トス）子同袍（シヨトホ）と申すは、このことに候ふ。仰せ下さるゝ、すこしもすこしも、御はづかしかるべき事にもなく候ふ。早々。（新井君美）

一四、運命その一

世の中の出来事の、來りて、われらの運命を左右するもの、その數、日に、百千なるのみならず。然れども、わ

れらが、これを認め得るは、たゞ、その表面に顯れ、實際に、結果を生ずる一半のみ。その、來らむとして、來らず、殆ど、己の上に附著せむとして、遂に、附著せず、そのままに消えゆく出來事は、また、實に、夥しからむ。もし、われらが、暗々裡なる、これらの出來事を認め得むには、われらの生涯の望と畏とは、まことに、無限無邊ならむ。ダビ、トのこと、以て、見るべきなり。

われらは、ダビ、トの既往を知らず、また、知るを要せず。われらは、いま、たゞ、二十歳の少年、はじめて、故郷の田舎を離れ、ポストン府にゆき、商家の手代とならむ

とする途上にある彼を見るのみ。彼の履歴は、小學校、れよび、中學校にて、ひととほりの教育を受けたりといふのみにて、事足るべし。田舎少年の心安さは、車も借らず、馬も借らず、日出より歩き出して、既に、日中に至れり。時は、これ、夏のなかば、漸く、覺ゆる疲勞と、ますます、加る暑熱とは、彼をして、かたへなる樹蔭に休息し、乗合馬車の來るを待ちて、これに投ぜむと決意せしめたり。

鬱葱たる、幾株の喬木、丘の上に立ち並び、ほとりには、生エカクテ青々トシタルまた、きよらかなる泉の水の涌きいづるあり。たと

ひ、ダビ、トならずとも、往來の人、誰か、この日中に、この樹蔭に遇ひて、ひとたび、憩ふことを懷はざらむ。ダビ、トは、まづ、泉の水に、渴きたる喉を潤し、たもむるに、負ひたる包を解き、それをして、その上につぎはぎせる、木綿の手拭を重ねかけ、これを、枕として、仰臥せり。太陽の光は、うちかさなれる枝に遮られて、ダビ、トの身にいたらず。往來の路は、昨日の大雨に濕ひたれば、少しも、塵を飛さず。生ひ茂れる緑の草は、絶好なる蔭よりも、快く、柔なり。泉の水は、沸々として、常に、耳邊に鳴り、縦横せる枝は、そよ吹く風の爲に、よりより、微揺す。ダ

ビ、トは、忽ち、心、陶然として、恍惚たるうちに、身は、いつか、熱衰、コトうまいの裡に落ちぬ。

ダビ、トは、樹蔭に眠り居たるが、途上には、或は、馬に跨り、或は、車に乗り、また、或は、歩みて、ダビ、トの前を來往するもの、點々たり。或者は、わき目もふらず、過ぎゆけば、彼の、こゝにあることをも知らざるなり。或者は、たまたま、彼の、こゝに横れるに、寓目すれども、たのが心の、忙しき思念に蔽はれて、別に、心も留めず、過ぎゆくなり。或者は、彼の、無邪氣に眠れるを見て、笑ひつゝ、去るもあり。或者は、その、道傍に眠れるを卑みて、眉志

かめつ、往くもあり。非難稱羨、一讚、一譏、すべて、タビ、トに轉れり。

やがて、一輛のはてやかなる輕車ありて、毛色うるはしき、二頭の馬を靡ツぎ、麟々として、馳せ來れるが、この木立の前に至りて、突然、とゞまりたり。そは、一本の轄ゆるみて、一箇の輪に、くるひを生じたればなり。車中にありつるは、商人夫妻にて、齡高く、品よき人なり。老夫妻は、從者が、輪を整ふる間、樹蔭に憩はむとて、立ち寄りたるが、その下に、タビ、トの横れるを見るより、俄に、驚きて、二三步、後に、さがりたり。ためつ、すがめつ、

去ばし、凝視し居たりしが、やがて、心を安んじたりけむ、この、うまいせる少年を驚さざるやう、去のび足して、再び、樹蔭にたち寄りつ、夫は、妻に低語せり、あの、こゝろよげに、眠れるさまを見よ、あの、呼吸する氣息の、極めて、容與なるを見よ、これ、健康にして、心やすらかなるものにあらざれば、能はざるなり。もし、余をして、かゝるうまいを得しめば、余は、わが歳入の半を割くともをしからじと。妻は、今、風のために、一方の枝のれしやられ、一條の、太陽の光、少年の面に漏れそゞくを見て、みづから、手を伸べ、纏れたる枝を解き、これを

蔽ひやりながら、また、夫に低語せり、「天は、この好少年を、われらに與へ給ふと見ゆるなり。われらが、從弟の子の所行に失望せる後、偶然、この樹蔭にたち寄りて、この少年に邂逅するは、まことに、不思議の極ならずや。かつ、熟視すれば、何となく、面ざし、逝きしヘンリーに肖たるやうなり。試に、彼を喚び醒さむか」と。夫はうち案じて、「それは、何の爲ぞ。われらは、まだ、少年の素性をも知らずして」と、いへば、妻も、やゝ、惑ひながら、なほも、思ひ入りて、「さりながら、かの、無邪氣なる容貌、かの、無心に眠れる姿よ」と、いひぬ。

今や、一箇の、莫大なる福は、ダビトの上に臨めり。この老夫妻は、たゞ、一人の子、ヘンリーを先立たせ、家に蓄へし、巨萬の富を相續せさすべき者もなく、せめては、遠き從弟の子にと、目ざして、これを尋ねしに、その子は、所行不良にして、心に適はず、いま、失望して、ボストン府に歸るなりけり。人は、かゝる時に當りて、さまざまの想像をも畫くものなり。妻は、再び、反復せり、「試に、喚び醒さむか」と。同時に、背後に、從者の聲あり、「修繕、整ひて候ふ」と。

老夫妻は、この聲に、忽焉として、われに復り、相攜へ

て、車上に、身を置けり。ダビトは、なほ、コウコウゼン 駒々然。

一五、運命その二

老夫妻を載せたる輕車は去りて、まだ、一里は行かざるべしと思ふ時、また、二人の人ありて、この樹蔭にたち寄りたり。木綿の頭巾を、目深に、被りたれば、審に見るべからざれども、顔の色、いたく、黒くして、衣服、粗野に、且、こゝかし、こゝに、幾多の汚點さへ印してあり。こはこれ、この邊に徘徊する山賊にして、今、その取物 贓物を分たむとて、この樹蔭に來れるなり。かくて、ダビトの

山賊

横れるを見るより、一人は、はやくも、他の一人に、「汝は、あの、枕にせる包を見ずや」と、囁けば、「されど、もし、目を覺したらば」と、いふを、ひとりは、急に、懷中を探りて、匕首の柄を、少し、露して、「これのみ」と、いふ。やがて、二人は、ダビトのほとりに進み寄り、一人は、その匕首を抜き、て、胸に擬し、一人は、頭の方にまはりて、その、枕とせる包をぬかむとす。この二人の顔、もし、思フテアヘー ダビトをして、目を開きて、見しめば、直に、以て、悪魔とやなさまむ。この時、忽ち、一頭の黄犬あり、鼻をうごかして、思フテアヘー 頻に、地を嗅ぎつゝ、こゝに、走せ來れり。ひとりの賊は、目ばやく、これ

を見つけて、いへり「やめ、やめ、かの犬の主人、ついで、ここに來るならむ」と。

一人は、匕首を、懷中に收めたり。一人は、ブランデー一壺を取り出せり。仕事の、將に、成らむとして、敗れたるを笑ひのゝしり、互に、幾口かを飲むうちに、おのれの、黒き顔に、一種の紅を生じ來れり。後には、ダビ、トのことをば忘れて、がやがやと、うち興じつゝ、相攜へて、また、出でゆけり。志かも、ダビ、トは、なほ、鞫々然。

一時間の眠は、ダビ、トの疲勞を醫し盡せり。ダビ、トは、すこし、身動せり。徐に、その唇を搖せり。聲はなけれ

ど、口の中に、ひとり、半殘の夢を語れり。をちかたに起る輪聲、既にして、（手）殷々、既にして轟々、益、近くして、益、高く、今や、轆轤として、尺寸の間に來れり。これ、一輛の乗合馬車なり。ダビ、トは、俄に、躍りて、起てり。「こや、御者、ここに、旅客あり」。上層に、席あり。ダビ、トは、馬車の上層に登り坐せり。ダビ、トは、前途、幾多の望をかけたる、樂しきポストン府に馳せ往けり、かの清泉には、一顧眄の別をだになさずして。

一たびは、富の神の、こゝに來りて、黄金の光、その水面に照射せることもありしは、ダビ、ト、知らざるなり。

また、一たびは、死の神の、こゝに來りて、その水上に、血を染めむとせることもありしは、ダビト、知らざるなり。嗚呼、彼は、生涯、遂に、これを知らざるなり。(森田文藏)

一六、 冒險心

世に處する、七分の俠氣(マキ)なかるべからず。去かも、俠氣のみならず、また、何人にも、幾分の冒險心あるを要す。苟も、冒險心のみありて、常識(ジョウジキ)なくんば、これ、無謀の狂夫のみ。もし、常識(ジョウジキ)のみ富みて、冒險心なからむか、また、これ、碌々(ロクロク)たる凡骨(ボウボネ)に過ぎざるべし。人生の要は、

七分の常識に、三分の冒險心を調合するを以て、適當なりと爲すべきが如し。

人間は活動せざるべからず。而して、いはゆる、用心家なるものには、思案に、日を暮し、何等の活動をも爲さずして、空しく、一生を終るものあり。慎重(ジョウジュウ)の態度(タイド)など云へば、如何にも、立派に聞ゆれども、時として、臆病者の遁辭(トクジ)たることなきにあらず。

れよそ、社會も、國家も、廣く云へば、人類も、いはゆる、用心家に負ふ所少くして、冒險家に負ふ所多きは、古今の歴史、實に、これが證人たり。新世界の發見者たる

コロンブスにせよ、喜望峰を週りて、印度への航海を開始したるバヌコ、ダ、ガマにせよ、苟も、人類の恩人帳に、その名を登録せらるべき資格あるものは、必ず、幾分の冒險的血液、その血管中に流れざるものはあらず。看よ、露國の、中亞細亞、及び、西伯利亞に膨脹したるは、誰の力ぞ。英國の印度大帝國は、何人の手によりて、建立したるぞ。米國民の、中央の大原野を横斷し、太平洋方面に蕃殖したるは、何者の先導に出でたるぞ。これ、あに、かの用心家輩の夢想する所ならむや。

いかに、天資聰明なる人と雖も、人、既に、神にあらず、

焉んぞ、未然を、悉く、洞觀するを得むや。故に、深く思ひ、審に慮り、而して、その、既に、得たる所を以て、いまだ、確めざる所に、ねよぼし、善にも、あれ、惡にも、あれ、みづから、その結果に對する責任を負ひ、斷々乎として、これを決行すべきのみ。再言すれば、知慮の及ぶ所は、知慮を以て、これに處し、知慮の及ばざる所は、勇氣を以て、即ち、冒險心を以て、これに處す可きのみ。吾人は、當初より、閉目せよと云はず、苟も、視力の達する所は、飽くまで、これを正視せよ。志かも、その、及ばざるに際しては、決して、低徊遲疑するを須ゐず。宜しく、暗中の飛躍

低徊
ニ非ズトシテ
進ムニ非ズ退ク

を試むべきなり。

然りと雖も、もし謀るべきを謀らず、吟味すべきを吟味せず、徒に、輕舉妄動を爲すが如き者あらば、これ、
あに、吾人の本意ならむや。嗚呼、あに、吾人の本意ならむや。
(徳富猪一郎)

一七、ベスピオ

熔巖は、月あかりにて、見るがよしとて、我等は、暮を
（父の馬を乗せ、熔巖を登る）
まちて、ベスピオに登りぬ。レッシオにて、驢をやとひて、
葡萄圃、貧しげなる農家など見つゝ、騎り行くに、漸く

にして、草木の勢衰へ、はては、片はになりたる小灌木、
半、枯れたる草の莖もあらずなりぬ。將に、没せむとす
る日は、熾なる火の如く、天をば、黄金色ならしめ、海を
ば、藍碧色ならしめ、海の上なる、群れる嶋嶼をば、淡青
なる雲にまがはせたり。眞にこれ、一の夢幻界なり。灣
に沿へる拿破里の市は、次第に、暮色微茫の中に没せ
り。眸を放ちて、遠く、望めば、雪を戴けるアルプの山脈、
氷もて、削り成せるが如し。

紅なる熔巖の流は、今や、目睫に逼り來ぬ。道絶ゆる
ところに、黒き熔巖もて、掩はれたる廣き地あり。驢馬

は、蹄を下すごとに、まづ探りて、志かる後に、踏めり。既にして、一の隆起したる處に逢ふ。その狀、新に、この熔巖の海に涌出せる孤嶋の如し。されど、その草木は、只、長低き灌木の疎に、生ぜるを見るのみ。こゝに、山人の草寮あり。兵卒數人、火を圍みて、葡萄酒を吞めり。こは、遊覽の客を護りて、賊を防ぐものなりとぞ。われ等を望み見て、身を起し、松明を點じて、導かむとす。劇しき風に、焰は、横さまに、吹き靡けられ、滅えむとして、纔に燃ゆ。博士は、疲れたりとて、草寮に留りぬ。我等のゆく手は、巖の間なる細徑にて、熔巖の塊の、蹄に觸るゝも

の多し。處々、道の、險しき谿に臨めるを見る。

既にして、黒き灰もて、盛り成したる、山上の山ありて、我等の前に横りぬ。我等は、皆、徒立となりて、驢をば、口とりの童に預け置きぬ。兵卒は、松明振り翳して、斜に、道取りて、進めり。灰は、蹠を没し、又、膝を没す。石片、又は、熔巖の塊ありて、歩毎に、滾り落つるが故に、縦に、列りつゞきて登るに、由なし。我等は、雙脚に、鉛を懸けたる如く、一步を進みては、又、一步を退き、只、一つとところに在るやうに覺えたり。兵卒は、巔近し。今、一息に候ふと、叫びて、我等を勵したり。されど、仰ぎ視れば、山の高

きこと、はじめに、異らず。一時許にして、纔に、巔に到りぬ。われは、奇を好む心に、驅られて、直に、踵を、兵卒に接したれば、まづ、足を、この山の巔に、著け得たり。

巔は、大なる平地にして、大小、いろいろなる熔巖の塊、錯落として、途に横る。平地の中央に、圓錐形なる、灰の丘あり。これ、火坑隄なり。火球の如き月は、早く、昇りて、この丘の上に懸れり。我等の、來路に、この月を見ざりしは、山の爲に、遮られたればなり。忽ちにして、坑口、黒煙を噴き、四邊、闇夜の如くにして、山の核心と覺しき處に、不斷の雷聲を聞く。地震ひ、足危ければ、人々、相

倚りて、支持す。忽ち、又、千百の巨礫を放てる如き聲あり。一道の火柱、直上して、天を衝き、迸り出でたる熱石は、ルビンを嵌めたる如き觀をなせり。されど、これ等の石は、或は、再び、坑中に没し、或は、灰の丘に沿ひて、顛り下り、復、我等の頭上に落つることなし。われは、心裡に、神を念じて、屏息して、これを見たり。

兵卒は、客人達は、山の機嫌好き日に來會はせ給ひぬ。とて、我等を揮きて、進ましめたり。われは、はじめ、その、何處に導かるべきかを知らざりき。火を噴ける坑口は、今、近づくべきにあらねばなり。導者は、灰の丘を、

左にして、進まむとす。忽ち見る、我等のゆく手に、火の海の横れるありて、身幹數丈なる、怪しき人影の、その前にゆらめくを。これ、我等に前だてる旅客の一群なり。我等は、手足を動して、熔巖の塊を避けつゝ、進めり。色褪せたる、月の光と、松明の火とは、巖の隈々に、濃き陰翳を形りて、深谷の觀をなせり。忽ち、又、例の雷聲に伴うて、火柱は、再び、立てり。手もて探りて、漸く、進むに、石土の熱きを覺ゆるに至りぬ。巖罅よりは、白き蒸氣、騰上せり。既に、して、平滑なる地を見る。こは、二日前に流れ出でたる熔巖なりとぞ。風に觸るゝ表層こそは、

黒く、凝りたれ、底は、猶、紅火なり。この一帯の彼方には、又、常の石原ありて、一群の旅客は、その上に立てり。導者は、我等一行を引ききて、この火殻を踐ましめたるに、足趾灸ぶるが如く、我等の靴が、黒き地に、赤き痕を印するさま、橋上の霜を踏むに似たり。處々に、斷文ありて、底なる火を透し見るべし。

我等は、彼の旅客の群に近づきて、これと同じく、一大石の上に登りぬ。この石の前には、新しき熔巖流れ下れり。恰も、金の熔爐より出づるが如し。その幅は、極めて濶し。蒸氣の、この流を被へるものは、火に映じて、

殷紅なり。四圍は、暗黒にして、空氣には、硫黃の氣満ちたり。我は、地底の雷聲と、天半の火柱と、この流とを見聞して、心中の弱處、病處の、一時に、滅盡するを覺えぬ。

われ等は、歸途に就きたり。この時、身邊なる熔巖の流に、爆然、聲ありて、陷窾を生じ、炎焰を吐くを見き。されど、われは、また、をのゝき、慄ふことなかりき。一行は、積灰の、新に、降れる雪の如きを蹴て、且滑り、且降るほどに、一時間の來路は、十分間の去路となりて、何の勞苦をも覺えざりき。われも、友も、心に、この遊の、たゞ事ならざりしをよるこびあへり。驢に乗りて、草寮にイナク、草寮ニ、廻り、カキ、カスラ

たれば、博士は踞坐して、我等を待てり。促し立てて、共に、出づるに、風歛り、月あきらかなり。拿破里灣に沿ひて行けば、熔巖の、赤き影と、明月の、青き影と、波面に、二條の長蛇を跳らしめぬ。(森林太郎譯即興詩人)

一八、旅況の古今

將軍ニ仕、シテ、朝、花ヨリ、下ス

嘉永年間、徳川氏に、將軍宣下の勅使として、京都より下されたりし、ある公卿の詠まれたる歌に、

君が代は、驛所うまやうまやに、驛所旅寢して、
くさのまくらも、知らて來にけり。

と、いふがあり。わが國、近時の旅店は、衾ヤシキ襦ユより、飲食に
 いたるまで、一も、闕フタヘトコロくるところなきこと、この和歌に
 て、明ならむ。この頃、肥後の竹添井井の棧ヤシキ雲峽クモセキ雨日記
 とて、支那にありし時、北京より、蜀シキに遊アソビびたる紀行の
 草稿を見しに、その長安に至りし條マチにいほく、凡、禹域
 客店、獨、僦ユ臥房、而無、他具。故、行旅者、必、齎ユ枕席衾襦、始、得
 涉シヨク遠。北地又無、廁竇、人皆、矢、於、豚柵。豚、常、以、矢、爲、食、瘦、削
 露、骨。有、上、柵、者、輒、來、群、於、後、驅、之、不、去。殆、使、人、困。此地、始
 有、廁竇之設。不、潔、淨、亦、勝、無、矣」と、見えたり。支那の旅況、
 これを、わが國の今日に比ぶれば、實に、苦しといふべ

きなり。顧ふに、世の、いまだ、開けざりし時に當りては、
 いづれの國か、然らざらむ。

わが國も、往時は、これに類せしこと多かりき。日本
 武尊は、皇子なり。その尾張の國に留り給ひし日、劔を、
 桑樹に懸けて、廁トイに上られたる事、史に、明なり。降りて、
 徳川氏の始に至りても、將軍秀忠、夜、廁トイに上りて、刺客
 の、麥隴中より、來り窺ふを見きといへば、その狀も知
 られなむ。然れども、わが國、古より、矢を以て、田に糞ふ
 故に、家として、廁竇トイの設なきはなかりき。たゞ、飲食、衾
 襦ヤシキの不便にいたりては、全く、支那に異らざりしなり。

番に、異らざりしのみにあらず、甚しきに至りては、旅店だにあることなかりき。これ、その往時、旅を以て、草枕と稱せし所以なり。古歌にいはずや、

家にあれば、筥にもる飯を、くさ枕、

たびにしあれば、椎の葉にもる。

と。飲食も、また、これに準ず。故に、軍防令には、兵士をして、人毎に、糲六斗を儲へしむといひ、伊勢物語には、涙を、糲の上に落すといひ、太平記には、饘を進むといへり。皆、これ、支那の「適千里者、三月聚糧」といふと、その趣を同じくせり。

柳庵雜筆に、木曾の贄川驛の一旅店に遣れる、慶長年間の宿帳といふものを載せたり。

御糲、ほとばし過し申さざる様、念入れ申すべく候ふ。夜夜の物、御先觸初に御書初き入れなき分は、睨睨と、御受け合ひ申さず候ふ。

又、令條記に、寛永三年五月、將軍上洛の時、路次中、宿賃御定書といふものを載せたり。

人に四文、馬に八文。たゞし、自分薪、焼き候はば、人に二文、馬に四文。馬屋も、これなく、自分薪、焼き候はば、二文。馬屋は、これなくとも、亭主の薪に候はば、四文

たるべし。京にては、馬屋、これなく、外に繋ぎ、自分の薪にて、四文の事。

それ、慶長より、寛永にいたるに及びては、世は、漸く、開けて、その旅況も、往時と同じからざるべきを、行旅は、猶糧を齎し、旅店を僦り、湯を請ひ、糲を食ひて、寝るにとゞまり、いはゆる、木賃にて、償ふに、薪の價のみを以てせしなり。若し、旅客、みづから、糲を漬すを煩しく思ひ、これを、旅店に託すれば、その漬すこと、度を過さしめて、竊むものありしを以て、ほとばし過さずといふ語を載せたるなり。

余、幼時、これを、故老に聞く。その言に曰く、昔は、諸國修行と稱する者、必ず、鍋と米とを齎し、至るところ、山野に露宿して、いまだ、嘗て、逆旅に就かず。今、劇場にて、宮本武藏に扮する者、必ず、横ざまに、一包を負ふ。これ、その飯を炊ぎし鍋なり。昌平、日、久しくして、纔に、その遺風を存するもの、ひとり、世のいはゆる、六十六部といふ者のみ」と。果して、聞く所の如くならば、我が國も、また、二百年前の旅況、必ずしも、支那と異るところあらざりしならむ。(那珂通高)

一九、野路の夕暮

余は心地よく、車の隅に凭りたり。むかひに、座を占めたる僕は、外套を、主の膝のあたりに置き、ほくちを、煙管の皿に點じつ。清涼なる空氣のこゝろよさ、いふばかりなし。

車は、美しく、廣き、田舎路に出てぬ。昨日の雨に、大地よく、志めりたれば、馬の蹄も、車の輪も、塵を起さず。さきに、馬丁の代りし時、先なるものの得し酒手の多かりければ、後なるものも、望ありとや思ひけむ。心地よきまで、馬を驅りぬ。馬車には、道すがら、ゆき逢はねど、

驢馬に挽かせたる、もどりの空車を追ひ越ししこと、幾度ぞや。空車の主等は、けふの潤利の計算をするにや、頑然として、空囊の上に坐したるが、驅け遙る馬車を見むと、頭を擡ぐるだに、ものうげなり。驢馬は、勇しき友の來るを見て、道を譲り、さて、事問ひたげに、首を振ぢ向くるを、馬丁は、うるさしと、鞭を舉げて、打たむとす。驚きて、飛び退く驢馬、鈴聲憂然、搖らるゝ車に驚く主の、ねぶたげに罵るを振りかへり見て、馬丁は笑ひぬ。

車は、前へ前へと、進み行く。左右の竝木は、飛ぶ如く、

前に見ゆるはなれ家は、忽ち側に來り、また、忽ち、後に
残り。稻田の邊に來れば、秘密らしきそよぎ聞ゆ。志
なやかなる幹に著ける鋭き葉は、夕風に吹かれて、相
摩軋し、えもいはぬさゝやきすなり。その間には、幾千
の昆蟲、稻の若葉にとまり、または、志めりたる土の上
を、飛びかひて、鳴けり。

車の、ロヂを過ぐる頃、涼しく、露けき夕は、空より、地
上に降りぬ。夕景色は、家をも、野をも掩ひぬ。數々の田
舎の寺より、アエ、アリヤの鐘の聲す。草葉に置ける夜
の露は、幾千の寶石かと見まがふばかりに輝きて、大

空に満ちたる星の、ふるひながら、透き徹りたる光を
反射す。この時、野の花と、新に、芟りし草とは、香を放ち
て、滿天地の氣象は、一種の、暢美なる感情を起したり。
嗚呼、この感情を知ること、最も、深きものは、誰ぞ。道の
傍なる木立より、うれしく、優しき聲に、祝賀の歌を歌
ふ鶯を措きて、また、誰かあらむ。

この歌を聞かむと願ふものは、暖き春の夜に、ロン
バルヂアなる野邊に來よ。野は、細流に、縦横に截られ、
街は、水に夾まれ、この上を掩ひて、そよぐ木の枝は、か
の、めでたき歌者の、最も、愛づる住居なり。

馬丁は顧みつゝ、次の驛は馬の數少ければ、客人を待たせやせむ。木のれ、この埋合に、一骨折らむ」といふ。余は、荒涼たる村驛に、夜深けて、馬を待たむは、面白からず思へども、かくいふは、馬丁の套語なればと、みづから、慰めて、たゞ「汝は、汝の職分を盡せよ」とのみ、いひぬ。

この職分をば、げにも、よく、盡しぬ。鞭を揚げて、馬に、驅足を踏ませつ。車の速力、餘に、大なれば、輪は、眞直なる道に、透迤たる蛇線を作りぬ。乍ち右へ、乍ち左へと、まがる車に驚きて、僕は、側なる欄を握りぬ。家も、木も、

橋の欄干も、道の印の石も、あわてふためきて、走り去るが如し。一時間ならぬに、さだめの路をば過ぎつ。見ゆるは、次驛のはじめの一燈なり。(森林太郎著水沫集)

二〇、星と花(天地有情) 土居 暁 絶句 卒ノ途ニシテ

わなじ自然の、

わん母の、

御手に育ちし、

姉と妹、

みそらの花を、

星といひ、

わが世の星を、

花といふ、

かれとこれとに、

へだたれど、

にほひはねなじ、
 星と花。
 ゑみと光を、
 よひよひに、
 かはすもやさし、
 花と星。
サレバ夜明
 さればあけほの、
 雲白く、
 御空の花の、
 去ぼむ時、
 見よ白露の、
 ひとしづく、
我が世の花ニ
 わがよの星に、
 涙あり。
涙はトウリナリ一ツ路が降リテ

二一、保元の亂

後白河院、諱は、雅仁、鳥羽第四の御子、崇徳同母の御

弟なり。近衛は、鳥羽の上皇、鍾愛の御子なりしかど、早
 世ましましぬ。崇徳の御子重仁親王、繼がせ給ふべ
 かりしに、もとより、御中、心よからてやみぬ。上皇、たほ
 しめしわづらひけれど、この御門立たせ給ふ。乙亥の
乙亥
 年即位、丙子に改元、年號を保元といふ。鳥羽、晏駕あり
 しかば、天下をあらせ給ふ。

左大臣頼長ときこえしは、知足院の入道關白忠實
 の次郎なり。法性寺關白忠通の大臣、この大臣の兄に
 て、和漢の才高くして、久しく、執柄にて、つかへられき。
 この大臣は、漢才、高く、きこえしかど、本性、あしく、たは

しけるとぞ。父の愛子にて、よこさまに、申し受けられければ、關白を措きながら、藤氏の長者になり、内覽の宣旨を蒙らる。長者の、他人にわたること、攝政關白はじまりては、その例なし。内覽は、醍醐の御代のはじめつかた、本院の大臣と菅家と、政をたすけられし時、相並びて、その號ありきと申すめれど、本院も、關白にはあらず、その例、たがふにや。兄の大臣は、本性、ただやかにわはしければ、思ひ入れぬさまにて、ぞ過されける。近衛の御門、かくれ給ひしころより、内覽を罷められたりしに、恨をも含み、たほかた、天下を、わがまゝにと

はかられけるにや、崇徳の上皇を申し勸めて、世をみだらる。父の法皇、晏駕の後、七箇日ばかりにやありけむ。忠孝の道、缺けにける事と見えたり。法皇も、かねて、悟らしめ給ひしにや、平清盛、源義朝等に召し仰せて、内裏を守り奉るべきよし、勅命ありきとぞ。

上皇、鳥羽より出て給ひて、白河の大炊殿といふ所にて、既に、兵を集められければ、清盛、義朝等に勅して、上皇の宮を攻めらる。官軍、勝に乗りしかば、上皇は、西山の方に遁れ、左大臣は、ながれ矢に中りて、奈良阪邊まで、落ち行かれけるが、遂に、客死せられぬ。上皇、御出

家ありしかど、なほ、讃岐にうつされ給ふ。左大臣の子ども、國々へつかはさる。武士どもも、多く、誅に伏しぬ。その中に、源爲義と聞えしは、義朝の父なり。いかなる御志かありけむ、上皇の御方にて、義朝と、各別になりぬ。餘の子どもは、父に屬しけるにこそ。軍敗れて、爲義も出家したりしを、義朝、あづかりて、誅せしこそ、ためしなき事には侍れ。嵯峨の御代に、奈良阪の戦ありて後は、朝に、兵革といふことなかりしに、これより、みだれ初めぬるも、時運のくだりぬるすがたとぞおぼえ侍る。(神皇正統記)

二二、爲朝の末路

さるほどに、爲朝を搦めて、参りたらむものには、不次の賞あるべしと、宣下ありけるに、八郎、近江の國、輪田といふ所に隠れ居て、郎黨一人、法師になして、乞食せさせて、日を送りけり。筑紫へ下るべき支度しけるが、平家の侍、筑後守家貞、大勢にて、上りければ、そのほど、晝は、深山に入りて、身を隠し、夜は、里に出でて、食事を營みけるが、病み出して、灸治など多くし、古き湯屋を儼りて、常に、わり湯をぞおける。

こゝに、佐藤兵衛重貞といふもの、宣旨を蒙りて、國中を尋ね求めけるところに、ある者の申しけるは、「このほど、この湯屋に居るものこそ、怪しき人なれ。大男の、怖しげなるが、さすがに、尋常げなり。歳は、二十ばかりなるが、額に、疵あり。ゆゝしく、人に忍ぶと覺えたり」と、語れば、九月二日、湯屋に下りたる時、三十餘騎にて、押し寄せてけり。

爲朝、眞裸にて、合ふ木を以て、あまたの者をば、うち伏せたれども、大勢に取り籠められて、いひがひなく、搦められにけり。檢非違使、請け取りて、二條を、西へ渡

す。白き水干袴に、赤き帷子を著せ、髻に、白櫛をぞ刺したりける。北の陣にて、叡覽あり。公卿、殿上人は申すに及ばず、見物の者、市を成しけり。面の疵は、合戦の日、正清に射られたりとぞ聞えける。

既に、誅せらるべかりしが、以前の事は、合戦の時節なれば、力なし。事既に、違期せり。いまだ、御覽ぜられぬものの體なり。且は、末代にあり難き勇士なり。志ばらく、命を助けて、遠流せらるべしと、議定ありしかば、流罪に定めぬ。たゞし、息災にては、後、悪しかりなむとて、肘を抜きて、伊豆の大嶋へ流されけり。

かくて、五十餘日にして、肩を繕ひて後は、すこし弱くなりたれども、矢束を挽くこと、今、二伏、挽きましたれば、ものの切るゝこと、昔に劣らず。爲朝のたまひけるは、「われ、清和天皇の後胤として、八幡太郎の孫なり。いかでか、先祖をば失ふべき。これこそ、公家より賜りたる領なれ」とて、大嶋を管領するのみならず、すべて、五嶋をうち従へたり。これは、伊豆の國の住人、狩野介茂光が領なれども、聊も、年貢をもいださず。嶋の代官、三郎大夫忠重といふ者の壻になりて、けり。茂光の「上臈壻取りて、われをわれともせず」と、うらみければ、匿

して、運送をなすを、爲朝、聞きつけて、舅忠重を呼び寄せて、「この條、奇怪なり」と、責めたる上、勇士なれば、始終、わがためあしかりなむとや思ひけむ、その弓矢を取りて、焼き棄て、すべて、嶋中に、わが郎等の弓矢を置かざりけり。むかしの兵、尋ね下りて、附き従ひしかば、威勢、漸く、盛にして、過ぎゆくほどに、十年にぞなりにける。(保元物語)

二三、 桃山時代の工業

豊臣氏の起るや、難波石山の大阪城を初め、京師内

野の聚樂第、伏見桃山の第など、續々、大土木を起したるがため、我が建築術の上に、一大進歩を來したり。殊に、桃山御殿の建設は、文祿の三年に當り、秀吉十四萬の貔貅を叱咤して、韓の八道を蹂躪し、武威を海外にかゝやかし、頃なりしかば、その建築、彫刻等の上にも、豪邁の氣象、たのづから顯れ、美觀、雄矩、共に、一世を壓したり。

桃山の建築は、今、詳に、考ふべからざれど、瓦の端を、黄金にて塗り、百間廊下に、黄金の燈籠を釣りしなど、その壯觀想ふべきなり。今も、世に、桃山の式を受けて、

建築したるもの、山城、近江あたりの寺院にありて、その式、皆、一定に出でたり。例へば、長押、鴨居を、黒漆にて塗り、その上に、蒔繪を施し、襖に、黄金を貼りつけたるなどの類にて、皆、そのかみ、豊太閤の意匠に出でしものなりと云ふ。京都には、西本願寺の飛雲閣の建築、又、今の豊國神社の門扉の彫刻など、桃山の遺物の現存するものあれば、就いて、その一斑を窺ふべし。豊太閤は、獨、これ等、外部の建築、彫刻等に、意を用ゐしのみならず、茶器の類より、衣服調度の類に至るまで、たのが意匠を、工人に授けて、作らしめしもの多かりき。筑紫

の陣中にありて、征韓の軍を指揮せし時すら、佐志山に、窯を築きて、種々の茶器を作らしめ、又、たのが意匠を、日記に圖して、はるばる、京師に送りて、茶入を焼かしめ、蒔繪をまかしむるなど、常に、意を、工藝の上に注ぎて、奨勵せられしかば、京都、伏見の間に、名工輩出して、工藝の隆盛を極めたり。

後藤徳乗の刀、劔具、埋忠、明壽の鏢、一條國廣の刀、樂常慶の茶碗、幸阿彌長晏の蒔繪、盛阿彌の漆器、西村宗全の土風爐、浪越與次郎の罐子、嘉長の金具、是閑、吉滿の假面、左近の挽物等、いづれも、豊太閤の寵遇の下に、

各、その技の精華を發揮して、桃山時代の趣致を代表せるものなり。

元和以來、京都、伏見に住居せし、豊臣氏恩顧の工藝家は、散じて、二つとなり、一は、江戸に入り、一は、加賀に入れり。こゝに在いて、蒔繪、金屬彫刻等の美術、始めて、加賀に起りぬ。さて、江戸に入りしものは、社會の變遷と、時代の風尚とに連れて、後には、全く、桃山の遺風を失ひしかど、加賀に入りしものは、北陸の別天地にありて、その遺風を、子々孫々に傳ふることを得たり。これ、加賀の美術、工藝の特色にて、世は、江戸將軍の時代

となりぬれども、加賀蒔繪、象眼など稱して、賞翫するもの多かりし所以か。(横井時冬著日本工業史)

二四、閑日月

○ 伊達政宗

ねなじくば、あかぬ心に、まかせつゝ、

ちらさで花を見るよしもがな。

○ 蒲生氏郷

限あれば、吹かねど花は、ちるものを

こゝろみじかき、春のやまかぜ。

○ 平忠度

行きくれて、木の下かげを、宿とせば、

花やこよひの、あるじならまし。

○ 源頼政

みやま木の、その梢とも、見えざりし、

さくらは花に、あらはれにけり。

○ 源義家

吹く風を、なこそ、の關と、ねもへども、

みちもせにちる、山ざくらかな。

二五、鹽原

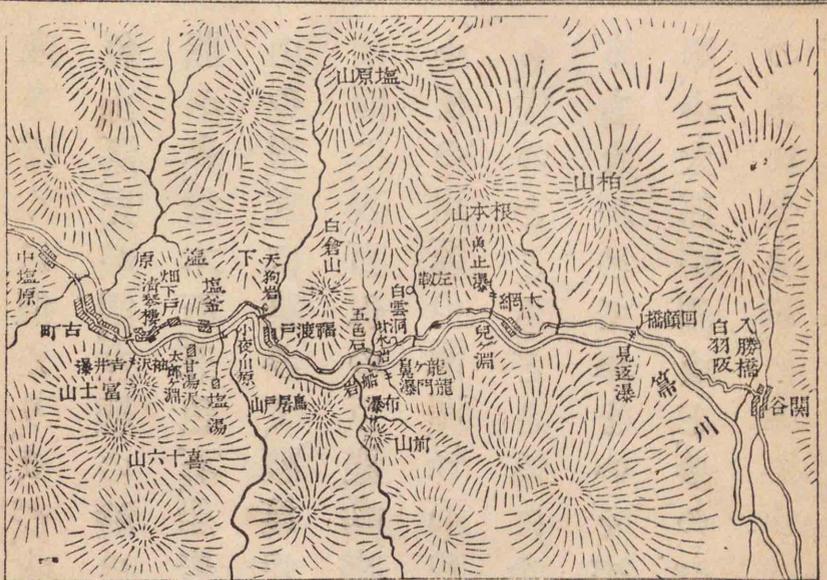
車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客はかはれど、われは、安からざる悒鬱を抱きて、やる方なき五時間のひとりに、倦みつかれつゝ、はじめて、西那須野の驛に下車せり。直に、西北に向ひて、今、なほ、茫々たる、古の那須野が原に入れば、天は濶く、地は遐に、たゞ、平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原は、そこぞと見えて、行くほどに、路は窮らず。漸く、千本松を過ぎ、進みて、關谷村に至れば、人家の盡くるところに、涼涼の響ありて、これにかゝれるを、入勝橋となす。

橋を渡りて、僅に行けば、日光暗く、山、厚く疊み、嵐氣冷に、壑、深く、陥りて、いくめぐりせる葛折の、後には、密樹、鳥、聲々に呼び、前には、幽草、花、歩々にひらき、愈、登れば、遙に、木がくれの音のみ聞えし流の水上は、淺く、あらはれて、すはや、こゝに、空山の雷、白光を放ちて、くづれ落ちたりとすさまじかり。道の右は、山を剗りて、長壁となし、石幽に、蘚、碧にして、幾條ともなく、白絲を亂し懸けたる細瀧小瀧の、珊々として、灑げるは、嶺上の松の調も、さだめて、この緒よりやと、見捨て難し。車を驅りて、白羽阪を踰えてより、回顧橋に、三十尺

の飛瀑をふみて、山中の景は、はじめて、奇なり。これより行きて、道あれば、水あり、水あれば、必ず、橋あり。全徑にして、三十橋。山あれば、巖あり、巖あれば、必ず、瀑あり。全嶺にして、七十瀑。地あれば、泉あり、泉あれば、必ず、熱あり。全村にして、四十五湯。なほ、數ふれば、十二勝、十六名所、七不思議、一々、探り得べくもあらず。

そもそも、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より、群峯の間を分けて、深く、西北に入り、綿々として、箒川の流に、浜る片そばの、四里に岐れ、十一里に亘りて、いたる處、巖の、水を夾まざるなきは、宛然、青銅の藥研に、瑠璃

末を碎くに似たり。まづ、大綱の湯を過ぐれば、根本山、魚止瀑、兒が淵、左鞞の嶮は古りて、白雲洞は朗に、布瀑龍が鼻、材木石、五色石、船岩など眺め行けば、鳥居戸、前山の翠衣に染みて、福渡戸の里に入るなり。それより、前面に、幾百仞の巨巖、嶮たる、天狗岩の奇勝を仰ぎ、小夜の川原の激湍、怪石の磊砢たるを俯瞰し、途すがら、崖のところどころに咲き残りたる躑躅、山藤などうちながめて、車をいそがするほどに、鹽釜の湯、甘湯澤、小太郎が淵など、夢のやうに過ぎて、いつか、畑下戸の里に著きぬ。



一村十二戸、温泉は、五箇處に湧きて、五軒の宿あり。こゝに、清琴樓と呼べるは、南に方りて、箒川の、ゆるく、めぐれる積に臨み、俯しては、水石の、鄰々たるを弄び、仰げば、西は、富士、喜十六の翠巒と對して、清風、座に満ち、袖の澤を落ちくる流は、二十丈の絶壁に懸りて、素

練を垂れたるとき吉井瀑あり。東北は、山また山を重ねて、琅玕の玉簾ふかく、一望の下、丘壑の富を擅にし、林泉のねごりを窮めらるゝなど、また、あるまじき別境なり。

われは、この、繪を看るとき、清穩の風景にあひて、かの途上、峻しき巖と、峻しき流との爲に、いく度か、魂飛び、肉消して、理むる方なく、かき亂されし胸のうちは、靄然として、頓にやはらぎ、恍然として、すべて、忘れたり。

まことに、よくこそ、われは來つれ。何ぞ、來る事の、甚

だ、たそかりし。山の麗しといふも、壤の堆きもののみ。川の暢けしといふも、水の逝くに過ぎざるのみ。牢として、抜くべからざる、わが半生の痼疾は、いかで、壤と水との醫すべきものならむと、齒牙にも懸けず、あなどりたりしれのれこそ、まづ、侮らるべき、愚のものなれや。

見よ、見よ、木々の緑も、浮べる雲も、秀づる嶺も、流るる溪も、そばだつ巖も、吹き來る風も、日のひかりも、鶏の啼く音も、空の色も、みな、たのづから、浮世のものなからで、われは、こゝに、憂をわすれ、悲をわすれ、苦をわす

れ、勞を忘れて、身は、かの雲と軽く、こゝろは、この水と淡し、希くは、今より、かくのごとくにして、わが生を終へむかな。

思もあらず、怨もあらず、金錢もあらず、權勢もあらず、名譽もあらず、野心もあらず、榮達もあらず、墮落もあらず、競争もあらず、執著もあらず、得意もあらず、失望もあらず、たゞ、天然の無垢にして、形骸の安きのみなるこの里、わが思をうづむる里か。わが骨をうづむる里か。(尾崎徳太郎)

二六、昔話三章

一、登仙法師

河内國、金剛寺とかやいふ山寺にありける僧の、「松の葉を食ふ人は、五穀を食はねども、くるしみなし。よく、食ひねほせつれば、仙人となりて、飛び行く」と、いふ人ありけるを聞きて、松の葉を好き食ふ。まことに、食ひねほせたりけむ、五穀の類、食ひのきて、漸く、兩三年になりけるに、げにも、身も、軽くなる心地しければ、弟子どもにも、「われは、仙人にならむとするなり」と、いひて、坊も、何も、弟子どもに頼ち譲りて、「上りなば、仙衣

を著るべし」とて、かたの如く、腰に、物を、一重、巻きて、出で立つに、「わが身には、これより外は、いるべき物なし」とて、年頃、秘藏して、持ちたりける水瓶ばかりを、腰につけて、既に、出でにけり。弟子、同朋、名残を惜みて、悲み、聞き及ぶ人、遠近より、市の如くに集りて、仙に登る人見むとて、集ひたりけるに、この僧、片山のそばにさし出でたる巖の上に登りぬ。二度に、空に登りなむと思へども、近く、まづ、遊びて、事のまま、人々に見せ奉らむ。いて、彼の巖の下に生ひたる松の枝に居て、あそばむ」と、いひて、谷より生ひ上りたる松の上、四五丈ばかり

ありけるを、さかさまに飛ぶ。人々目すまし、哀を浮べたるに、いかがが志つらむ、心や臆したりけむ、かねて思ひしよりも、身重く、力、うきうきとして、弱りにければ、飛ばずして、谷に落ち入りぬ。人々、あさましく見れども、これほどの事をれば、やうあらむ、定めて、飛び上らむずらむと見るほどに、谷の底の巖にあたりて、水瓶も割れ、わが身も、散々に、うち損じて、たゞ、死にに死ぬれば、弟子、眷屬、騒ぎ寄りて、「いかに」と、問へど、いらへもせず。纔に、息の通ふばかりなりけれど、とかくして、坊へ昇き入れつ。こゝに集れる人、笑ひのゝしりて、歸り

けり。さて、この僧、あるにもあらぬやうにて、痛み臥せり。とかく、いふばかりなくて、弟子も、はづかしながら、あつかふ間、松の葉ばかりにては、命生くべくも見えねば、いみじく、食ひのきつる五穀をもて、さまざま、いたはり養へば、命ばかりは生くれども、足、手、腰もうち折りて、起居も、えせず。今は、松の葉食ふにも及ばず、もとの如く、五穀貪り食ひて、弟子共に、ゆゝしく、譲りたりし坊も、寶も取り返して、かゝまり居たり。仙道に至る人、たやすからぬ事なり。(十訓抄)

二、連歌法師

「奥山に、猫またといふものありて、人を食ふ」と、人のいひけるに、「山ならねども、これらにも、猫のへあがりて、猫またになりて、人取る事はあなるものを」と、いふ者ありけるを、なに阿彌陀佛とかや、連歌しける法師の、行願寺のほとりにありけるが、聞きて、一人あるかむ身は、心すべき事にこそと思ひけり。頃しも、ある所にて、夜更くるまで、連歌して、只ひとり、歸りけるに、小川の端にて、音に聞きし猫また、あやまたず、脚の下へ、ふと、寄り來て、やがて、搔き附くまゝに、頸のほどを食はむとす。肝心も失せて、防がむとするに、力もなく、足

も立たず。小川へ轉び入りて、助けよや、猫また、よや、よや」と、叫べば、家々より、松どもともして、はしり寄りて、見れば、このわたりに見知れる僧なり。こは、いかに」とて、川の中より抱き起したれば、連歌の賭物取りて、扇小箱など、懷に持ちたりけるも、水に入りぬ。稀有にして、助りたるさまにて、はふはふ、家に入りけり。飼ひたる犬の、暗けれど、主を知りて、飛び付きたるなりとぞ。(徒然草)

三、弓取法師

あるところに、強盗入りたりけるに、弓取に、法師を

たてたりけるが、秋の末つ方の事にて、ありけるに、門のもとに、柿の木がありける下に、この法師、かたて矢はげて、立ちたる上より、うみ柿の落ちけるが、この弓取の法師が頂に墮ちて、潰れて、さんざんに、散りぬ。この柿の、ひやひやとして、あたるを、かい探るに、何となく、ぬるぬると、ありけるを、はや、射られにたりと思ひて、臆してけり。かたへの輩にいふやう、「はやく、痛手を負ひて、いかにも、延ぶべくも覺えぬに、この頭うて」といふ。「いづくぞ」と問へば、「頭を射られたるぞ」といふ。探れば、何とは知らず、濡れわたりたり。手に、赤く、物著き

たれば、げに、血なりけりと思ひて、さらむからに、けしうはあらじ、引き立てて行かむとて、肩に掛けて、行くに、「いやはや、いかにも、延ぶべくも覺えぬぞ。たゞ、はや、首を切れ」と、頻に、いひければ、いふに隨ひて、うち落しつ。さて、その首をつゝみて、大和の國へ持ちて行きて、この法師が家に投げ入れて、志か志か、いひつることとて、取らせたりければ、妻子、泣き悲みて見るに、更に、矢の痕をし、むくるに、手はし、負ひたりけるか」と、問ふに、「志かにはあらず、この頭の事ばかりをぞいひつるといへば、いよいよ、悲み悔ゆれども、かひなし。臆病は、

うたてきものなり。さやらの心ぎはにて、かくほどの
振舞しけむ、わろかさこそ。(古今著聞集)

再訂中等國語讀本卷六終

明治三十八年十一月十五日再訂改版印刷
明治三十八年十一月十八日再訂改版發行
明治三十九年二月十六日再訂第二版印刷
明治三十九年二月二十日再訂第二版發行

全十册

定各卷金廿五錢

明治三十三年九月二十二日
文部省檢定
(用科語國校學中)



著者 故落 合直 文

相續者 落合直 幸

補修者 明治書院編輯部

發行者 三樹一平

印刷者 宮本 敦

發行所
販賣所

東京市神田區錦町一丁目
電話本局二四三八番
東京市神田區南乗物町
電話本局八九二番

明治書院
明治圖書株式會社

